

読書に興味を持たせるための同じ書名の本の読み比べ法 — 2冊の本『ジャックと豆の木』を題材に「気づいて、伝えて、楽しめる」読み比べ法の提案 —

大河原清*・荻間澤勇人**

(2011年3月4日受理)

OOKAWARA Kiyoshi and KARIMAZAWA Hayato

A Method of Comparative Reading on Two Versions of “Jack and the Beanstalk”
in order to Ignite Students’ Interest in Reading

要約

同じ書名『ジャックと豆の木』の2冊の本を高校2年生に読んでもらった。最初にミルクが出さなくなったので、牛を市場に売りに行く本である。この本の冒頭部分について、できるだけ数多くの疑問点、不思議な点、矛盾点を個人的立場で列挙してもらった。続いて、小グループを作って、グループ内で疑問点、不思議点、矛盾点を披露し合い、自分では気づかないことを、友達の発言の中に発見させた。これらの疑問点などをグループ毎に黒板に掲示して、競わせて得点づけをした。最後にこれまで出された疑問点などの解決が図られるような、別バージョンの本『ジャックと豆の木』を読んでもらった。高校生86人は、普段、グループでの話し合いをする経験が少ないことから、82.5%の71人が読書への興味を持った。

本論で提案する同じ書名の本の読み比べ法について、高校生は次の通り述べていた。「一つの物語を、様々な目線から見たり、読み比べをしたりして、自分の疑問などを見つけ、真相に向かって行くのが、これほど楽しいということを知らなかった。また、他人の主張なども聞いて他人の考え方や人柄までも知ることができて、とても楽しかった。／意見を出し合ったりするのは、苦手なので、不安だったが、自分が考えつかなかった意見

がたくさん聞けて、面白かった。『ジャックと豆の木』をもっと読みたくなった。自分とは違う考えや、自分が知らなかったことを学ぶことが楽しいと初めて思った」

1 研究目的

読書に興味を持たせる一つの方法として提案する以下のやり方が、読者の読書への興味を実際にかき立てるかどうかを、実施後のアンケート調査ならびに感想文の意見から実証する。

2 実践のための2冊の本と実践の手順

2-1 同じ書名の2冊の本

本 a (or 物語 a) と本 b (or 物語 b) は同じ書名の『ジャックと豆の木』である。本 a は三宅忠明訳 (1978) の『ジャックと豆の木』であり、本 b は大宮杉訳 (1977) の『ジャックと豆の木』である。実践では冒頭部分のみを取り上げた。

三宅の『ジャックと豆の木』では、ミルクを突然出さなくなったことで、牛は市場に売りに出されるのに対して、大宮の『ジャックと豆の木』では、ジャックは怠け者で働かず、家は極貧のために、母親は自分の着物を売り、さらにテーブルや戸棚を売り、家の中は空っぽの状態になっており、最後に残された牛が売りに出されるという設定に

*岩手大学、**岩手県立盛岡農業高等学校

なっている。

2-2 実践の手順

(1) (集団) [DVDによる事前視聴] 事前に、DVD『ジャックと豆の木』(約15分)を視聴する。読書の前であれば、必ずしも開始直前でなくともよい。

(2) (個人) [個人による本aの読書] 本a『ジャックと豆の木』の冒頭部分を、各個人で読む。

(3) (個人) [個人による疑問点の列挙] 疑問点・不思議な点(以下、「不思議点」と表記する)・矛盾点を各自、ノートに列挙する。

(4) (小集団) [グループ別疑問点の列挙] 少人数のグループに分かれ、個人で列挙した疑問点・不思議点・矛盾点を披露し、自分の挙げなかったものがあるのを知る。同時に、グループで新たに何か疑問点・不思議点・矛盾点を発見できるかについて、話し合いをして、グループのまとめをする。それらを模造紙に書く。模造紙1枚には一つの疑問点・不思議点・矛盾点を書く。

(5) (全体) 黒板へ1枚ずつ模造紙を掲示する。

(6) (大集団) [グループ毎の疑問点列挙競争] クラス全体に、模造紙に提示された疑問点・不思議点・矛盾点を見せながら、最初のグループから始めて、提示した項目について、教員側(出前講義なので、講師側)で◎、○の評価をすることで、最後のグループまで全グループに得点を付与する。◎は普通には思いつかない問題点・不思議点・矛盾点で20点を、○はノーマルな指摘で、10点を付与した。これらの作業を終了してから、次に、

(7) (個人) [解決策の一例となる本bの読書] これまでに提出された疑問点・不思議点・矛盾点の解決策になると思われる本bの読書を通して、これまでに出示された疑問点・不思議点・矛盾点の解決を図る。

(8) これまでに出示された疑問点・不思議点・矛盾点がある程度解消されるようになったかを、調査用紙に感想文の形で記述してもらう。

3 指導方針

1) ブレイン・ストーミングにより、できるだけ数多くの疑問点・不思議点あるいは矛盾点を挙げさせる。

2) 対話的構成主義(Dialectical Constructivism)の立場(Woolfolkら(1998))から、友人の意見に耳を傾け、自分の考えにないものを学ばせる。

3) グループ間で競わせることで、友達と一緒に考えることの大切さを知らせる。学びは必ずしも個人的競争ではないことを特に強調するためである。

ウィルソン&レスリー(吉田訳2004)が「学びの原則」で述べる「⑦協力し合えること→競争させたりバラバラで学ばせるより、相互にやり取りした方がよく学べる(今日、何人かでできたことは、明日、一人でできる)」ことの強調である。

4) 読み比べということに興味を持たせて、自分から読書をしたいという気持ちを起こさせる。

5) 題材として子供の頃から読み聞かせられた、身近に感じられる童話『ジャックと豆の木』が、豊富な謎と矛盾に満ちていることを知らせる。

4 本の選定

読書対象である本aと本bとして『ジャックと豆の木』を選択した理由は、1)誰でも子供の頃、この本を読んだか、聞いた経験がある、2)訳本によって、内容表現が異なっている、3)本aの問題点の解決策として、本bに相当するような種類の同じ書名の本がある、4)関連するビデオやDVDがあり、視聴可能であることである。

訳本によって内容が異なることは、読者が子供の頃読んだ内容に固定されてきた概念を打ち砕く点で、読者にもう一度、読書について、本当はどのような内容だったかに注意を向けさせる機能がある。

次に、各個人に疑問点や不思議点や矛盾点を列挙してもらうことは、なんとなく読んでいる読み方に、注意を向けさせる機能がある。

それらの疑問点・不思議点・矛盾点を持ち寄り、グループ・メンバーで話し合うことで、自分一人

では湧かない考え方やものの見方があることを、友達の意見から知ること、自分以外の世界（視点や観点）があることを知らせる機能がある。

さらにグループ間競争をさせることで、より小さなグループでの読み方・考え方を、クラス全体に広げることで、さらなる読み方・考え方があるということに気づかせられる。より広い読み方・考え方の存在に気づくことで、個人ではなく集団による共同的思考の重要性に気づかせることができる。

同一タイトルの別の本bを読み、本aでの疑問点・不思議点が解消されることを通して、同一タイトルの本でも、内容がかなり違っていることを示せる。原本の違い、訳者の訳し方の違いによって、読書の仕方が異なってくることを示すことで、より一層読書への興味・関心を深めることができるものと思われる。

5 出前講義の経緯と実践方法

出前講義を高校生に対して実施して欲しいという依頼があった。頻繁に読書の必要性が叫ばれていた時期であり、朝読書の薦め、音読の薦めなど、多様な読書の方法が提案されるようになってきた。かねてから、幼児・児童向け童話や民話に個人的に興味もあり、しかも高校生なら誰でも知っている本を取り上げ、面白い方法を提案することで、読書への興味をもたせられないだろうか考えた。

他方、大学での講義の中で、近年の学びの方向が、個人で考えることから、集団で考える、いわゆる共同体的学びの世界への関心が高まっていることから、個人の枠を超えることで、集団の力を示す題材は何かないかと思案した。

たまたま手にしてわが子むけに読んでいた『ジャックと豆の木』の本に、大別して、2つの版のあることに気づいた。一方は、他方の疑問点の、いわゆる解決版になっているものであった。

出前講義は、市内の高校2年生2クラスを対象に、それぞれ2校時分の講義をすることであった。一般に出前講義で見られる大学紹介ではなく、

大学で実際に講義している内容という希望であった。大学生にも読書への興味をかき立てたいという思いから、提案する方法を、講義の中で一度実施して、その後に、出前講義の2クラスを対象に、読書実践をすることになった。講義というよりも、むしろ読書演習と呼ぶ方が相応しいかもしれなかった。

大学生を対象とする読書についての結果は、今回の報告(2)としてまとめる予定である。本稿では、高校生を対象とする読書実践を中心に述べる。

最初に、大創産業で市販されていたDVD『ジャックと豆の木』を15分程度視聴してもらった。これは出前講義のお世話係の先生に、講義前に視聴させて欲しいと依頼した。

次に、出前講義の中で、本aを読んでもらった。本a（添付資料または感想文整理のために、文章番号を付けた資料1を参照）は三宅忠明『ジャックと豆の木』（1978年 家の光協会発行 pp.50-57）である。

本aの範囲（貧しい生活をしていたジャックが、牛がミルクを出さなくなったので、市場に向かう途中、老人と出会って、老人とめずらしい色の豆と交換して、家に戻ると、母親は怒りのあまり、その豆を窓の外に放り出してしまった。翌日、天まで届く豆の木を登り、高い塔のある大きな家に辿り着くと、大きな女が立っていた。朝ご飯をねだると食べさせてくれた。そこに大男の人食い鬼が戻ってきた。その足音で家がぐらぐらする場面まで）

次に、各個人で、できるだけ数多くの疑問点・不思議点・矛盾点を、末尾に添付する資料2のアンケート用紙に列挙してもらった。

次に、座席近くの友達同志で4～5人からなる小グループを構成して、疑問点を列挙してもらい、クラス全体にむけて、発表してもらった。

その後、最後に疑問点・不思議点・矛盾点を解決するために、本b『ジャックと豆の木』を読んでもらった。本bは大宮杉『ジャックと豆の木』(1977年 日本書房発行 pp.10-37)である。

本bの範囲(冒頭部分から豆の木を登って、みしらぬ国に到着する冒頭場面まで。本aでは、牛を売りに出す理由が、牛がミルクを出さなくなったからであるのに対して、本bでは、ジャックの家族は極貧のために、ありとあらゆるものを売ってしまい、最後に残った牛を売りに出さざるを得なかったために、牛を売ることになった。本bでは、老人は近所の肉屋の主人になっており、ジャックの名前を知っていて、ジャックに話しかけることが不自然でなくなっている。肉屋はジャックに豆を誘導的に買わせることを仕掛けている。本bの小見出しは次の通りである。「なまけもの ジャック」(冒頭部分)、「め牛とまめのふくろ」、「おかあさんのいかり」、「まめの木のたんけん」、「みしらぬ国」(5行目まで))

実施日 2010年10月21日

出前講義Ⅰ 13:15~14:15 受講生数44名(男性26名・女性18名)

出前講義Ⅱ 14:40~15:40 受講生数45名(男性30名・女性15名)

同一方法で2クラスを実施した。なお、結果の記述は、3人の未記入もあり86人分を分析対象とした。回答のあったアンケート用紙に基づいている。以下の結果の整理は、講義ⅠとⅡをまとめて行っている。

6 量的分析の結果

講義では、感想文ばかりではなく、量的な指標として、高校生を対象に次の項目について調べた。

(1) 今回の同じ書名の2冊の本の読み比べ法を通して、読書に興味を持ったか。(2) 普段の読書についてはどうか。(3) 今回のような読み比べ法のやり方を続けたいかどうか。

回答を記入した高校生は86人であった。今回の試みを通して、(1) 読書に興味を持ったかについ

て、5段階で回答を求めた結果は、次の通りであった。度数の多い方から、「4 普通より興味を持った○」が45人(52.3%)、「5 非常に興味を持った◎」が26人(30.2%)で、同じ書名の本の読み比べ法に興味を持った者は、高校生86人のうち、合わせて71人(82.5%)であった。これらに続くのが「3 普通」の11人(12.8%)、「2 あまり興味を持たなかった×」の2人(2.3%)、「1 全然興味を持たなかった××」の0人と、普通および無回答者は86人中の13人(15.1%)であった。

次に、このような方法への継続性について、「今回のやり方を続けたいですか」に対しては、「1 はい、2 いいえ」で回答してもらった結果、無回答8人、「1 はい」が72人(83.7%)、「2 いいえ」が6人(7%)であった。86名中、「はい」と今後の継続性を肯定する者が約84%だった。

[試行直後の興味喚起と継続性への期待] 以上の結果から、今回の試みに対する直後の読書への興味は約83%、今後の継続性への期待は約84%と、共に8割を越えることから、今回の試みが強い興味と、学びたいという意欲を高めたことが分かる。

ただし、こうした傾向の背景には、学校が勉強中心のために、読書時間を持ってないということが考えられる。そこで、同時に普段の読書について、毎月何冊程度読んでいるかを調べた。その結果、高校生86人のうち、最大数15冊(1人)~最小数0冊(6人)の範囲において、度数の多少にそって述べると、1冊(30人)、無回答25人、2冊(11人)、3冊(7人)、5冊(2人)、10冊・7冊・4冊(各1人)、この他、反復して読むが1人であった。1冊程度の読者数30人(34.9%)が最大であった。

ところで、無回答25人が多かった理由は、5段階の質問項目と読書冊数を問う調査用紙の記述箇所が接近しており、冊数を記入する必要がないと判断したためかもしれない。なお、添付する資料3のアンケート用紙では、その点を改善してある。

同じく「あなたは普段、読書をしますか」という問いに対する5段階による回答では、度数の多少の順では、「3 普通」が28人(32.6%)、「2 あ

「あまり読まない×」が26人(30.2%)、「4 やや読む○」が13人(15.1%)、「1 全然読まない××」が10人(11.6%)、「大変良く読む◎」が6人(7%)であった。無回答は3人(3.5%)であった。つまり、読書好きな傾向にある者は、86人に対して19人の約22.1%であった。これに対して、読書をしない者の割合は36人の約41.2%と、半数弱があまり読書をしないことが分かる。

7 本 a (物語 a) の疑問点・不思議点・矛盾点の結果

表1「高校2年生86人の抱いた疑問点・不思議点・矛盾点の整理」は、高校2年生86人の本 a (物語 a) を読んでの疑問点・不思議点・矛盾点の結果を整理したものである。左端から、整理番号は、本論の説明の都合上付した番号である。その右隣の文章番号は、末尾に添付する資料1に示す通り、文章一つ毎に付した番号である。その元となった本 a をやはり末尾に添付してある。調査時にどのような資料を提示したかを示すためと、今後も同じような調査を実施する場合に、つまり調査対象を小学生や中学生に対しても実施する場合に、使用可能な資料として掲載してある。

表1は、86人の疑問点・不思議点・矛盾点が合わせて度数として401個挙げられている。一人当たり約5つ弱である。以下ではスペースの都合上、全てコメントすることができないので、その一部についてのみコメントする。

整理番号4と5は、父親の死因や、いつ頃亡くなったかという疑問である。一見、見過ごされるかもしれないが、後に、大男の宝物の元の所有者ともかわり、本 b によれば、ジャックの生まれる前に、大男によって父親は殺され、ジャックの父親の所有していた宝物が盗まれたことが分かる。ジャックが大男の宝物を盗むと、道徳的に悪いことを教えるということに対して、さまざまなバージョンが考えられ、このような記述を採用したという説もあるのではないと思われる。

整理番号1の「昔とはいつ頃か?」という疑問

も、単なる疑問として片づけしないで、この『ジャックと豆の木』が創作された時代はいつ頃なのか、という問題意識と関連付けることで、イギリスの歴史やゲルマン民族の移動の歴史を考える上で、有益ではないだろうか。

整理番号6のジャックの年齢がいくつぐらいかも、整理番号19に示す通り、ジャックが働いていたということを知ると、当時は学校もなく、働くことが日常生活の中心に位置づいていたことが分かる。

整理番号9では、最初だけ漢字で「白乳号」と、そのフリガナとして「ミルキーホワイト」と記述されているが、それ以後に続く文章では、牛の名前は、ミルキーホワイトで使用されている。牛の名前のない物語もある。おそらく、家族の一員として牛を大切に飼っていたのなら、牛に名前も付けていたであろうと思われる。物語の冒頭に、名前のある牛を大切に育てる場面を説明する文章があると、この疑問点は解消されたかもしれない。

整理番号10は牛そのものについての疑問である。結論から述べれば、雄牛も雌牛も両方とも角がある。それでは、雄牛と雌牛はどのように見分けるか。一番はっきりしているのは、大きな乳房があるかどうかであろう。日本の昔話に出てくる動物は、牛や馬が冒頭に出てくることは少なく、西洋の場合には、牛や羊であることを考えると、農業の在り方を知る上で、牛の登場はその国の農業の背景を知る上で一つの手がかりとなろう。余談ではあるが、家畜である牛、豚、鶏の3つを学習対象にすることは、食が家畜動物の命を取って、人間が生きているということを考える上で、大切な学習対象になるものと思われる。

整理番号15は、度数が18と多く、「ミルキーホワイトがミルクを突然出さなくなったのはどうしてか」という疑問である。関連して、整理番号11の「なぜ、雌牛は1頭だけ飼っていたのか」という疑問は、牛1頭だけで、生活ができるのだろうかということであろう。岩手県は牛の放牧の盛んな牧畜県であり、普通は数頭以上の牛を飼っているのを、見てきたという地域性からの疑問かもし

表1 高校2年生86人の抱いた疑問点・不思議点・矛盾点の整理				
整理番号	添付資料文章番号	度数	備考: 文章番号は末尾資料本a(物語a)「ジャックと豆の木」(三宅忠明 1978)を参照のこと、調査人数 86人	
1	1	1	昔とはいつの頃か?	
2	1	1	なぜ貧しいのか?	
3	1	1	挿絵が何か分からない	
4	2	13	父親の死因、どうして死んだのか?	
5	2	1	父親が死んでから何年か?	
6	2	7	ジャックの年齢はいくつくらいか?	
7	3	2	ミルクーフホワイトという名前のネーミングセンス	
8	3	5	なぜ白乳号(ミルクーフホワイト)という名をつけたのか?	
9	3	2	最初だけ白乳号(振り仮名:ミルクーフホワイト)と書いている・4行目以下はミルクーフホワイトし記されている点	表現
10	3	1	雌牛と雄牛の違いは、牛に乳首は何個あるか?	農牧?
11	3	1	なぜ、雌牛は1頭だけかっていた?	
12	3	1	「ほそぼそと」	表現
13	3	1	どうして貧しいのに、白乳号を飼っていたのか?	
14	3	1	ミルクが売っただけで、暮らしていけるのか?	
15	4	18	ミルクーフホワイトのミルクがいきなり出なくなったこと?	
16	5	1	ミルクを市場へ売りに行けないと、パンを作る金もできないのか?	
17	7	5	なぜ、拳を握って言う必要があったのか?	
18	11	3	お母さんは、なぜ働かないのか?	
19	13	1	以前も働きに出た・・・それならば、母は何をしているのか?	
20	11	2	ジャックは学校に行っていないのか?	
21	12	4	前にジャックのことを雇ったくれる人がいなかったのか?	
22	13	1	「いつかもそうだった」とあるけど、そのときはどうして牛を売らなかったのに、今は売ろうとしているのか?	
23	15	1	1回ミルクを出さなくなったただけなのに、どうして直ぐ売りに出してしまうのか?	
24	15	1	牛を食料にせず、売ろうとした理由	
25	15	1	ミルクーフホワイトがどのくらいの値で売れるのか分からないうちに、たった1つの収入源を売ろうと言ったこと	
26	15	1	ミルクが出ない牛が売れるのか?	
27	15	3	牛を一頭売っただけで商売ができるのか?/当時の牛の値段?/牛をたった一頭売っただけで、何かの商売の元手になるのか	
28	17	1	市の立つ日ってなに?	
29	18	2	母親はジャックに牛を売ってくるように言っているけど、自分でやればいいんじゃないのか?・母が売りに行ったほうが、確実だったのに	
30	18	1	子供を一人で行かせる?	
31	18	1	ぼく(18)、おいら(24)の2つを使い分けている	表現
32	21	7	そもそも老人は何者なのか?	
33	21	2	怪しい老人と親しげに話すジャック・ジャックはなぜ老人を疑わないのか?	
34	21	2	老人と大男の関係は?	
35	24	41	おじいさんは、どうしてジャックの名前を知っているのか?	
36	29	15	老人の不思議な質問・なんでいきなり豆を五つ持つ方法を尋ねたのか?	
37	29	1	老人は最初に5粒の豆を持つには?と聞いたのに、ジャックが受け取った数は、具体的ではないのは、なぜか?	
38	31	20	なぜジャックは「両手に二つずつと、口に一つくわえる」と答えたのか?・豆を五つ片手で持てないほど大きい豆だったのか?	
39	34	6	豆の大きさ・大きな豆の木なのに、種は小さいのか	
40	34	1	豆に毒が入っているかもしれない	
41	35	1	めずらしい色をした豆が何色なのか?	
42	35	4	不思議な豆を、どうして老人が持っていたか?	
43	35	1	いくつぶかの豆は何粒か?	
44	35	3	両手に持ちきれないほどの、豆を入れていた老人のポケットの大きさ・なぜポケットに入ったのか?	
45	36	7	老人はなぜジャックが利口ものだと、思ったのか?・大きい豆と想定してか?	

46	36	4	老人は、なぜジャックの牛と交換しようとしたか?・頼んだ訳でもないのに、老人が牛と豆を『とりかえてやってもいい』と言っていること	
47	41	4	一晩で豆の木が天まで届いたこと	
48	41	1	老人は、なぜ天まで届く木の豆を知っていたのか?	
49	41	2	ジャックは天まで登る豆をもらって、どうするつもりだったのだろうか? 天に言っても食べ物があるでもなし。	
50	41	1	豆が天まで届くことを、なぜ知っていた?実際に見たから? なら、少なくとももう1本豆の木があることになるか?	
51	41	1	天まで届くとは、どこまでか?	
52	45	3	老人に取り替えてもらおうと言っているのに、老人の身元や連絡先を聞かないのは、馬鹿でやないのか?	
53	45	3	嘘だったら牛を返すと言いながら、正体を明かさないじいさん・口約束だけで、全く返す保証が無い	
54	46	1	「そんなら」?	
55	45	1	本当だったら、牛を返すなら、最初からあげれば良いのを、なぜ交換したか?	
56	47	2	何にもならない豆の木と、牛をなぜ交換したのか? 豆と牛を交換すること・利益になるかも分からないのに、なぜ牛と交換したのか? 天に行っても食料があるとは限らないのに、なぜ豆と牛を取り替えたのか?	
57	47	4	なんで天にまでなる豆だからといって、牛と交換したのか?	
58	47	1	老人の豆と牛との価値観?	
59	47	3	なぜ初対面の老人の言うことを信じたのか? 市場に牛を一人で売りに行けるレベルの知識を持つジャックが、知らない男の交換要求に応じたのか、普通断らないのか?	
60	47	4	なぜジャックは簡単に豆と牛を交換したのか? 豆を撒いて、木が天まで届いても、お金に変わるものはないのに、ジャックはどうして牛を交換してしまったのか	
61	47	1	5つの豆の話なのに、豆を5つくれなかった	
62	?	1	豆→わしじゃだめか?	
63	49	1	53ページでは(49)、「まだ日が高い」と強調していたのに、54ページでは(72)「今夜は、」と、夜になっているのか?	矛盾
64	57	3	なぜポンドを使っているのか?・日本語なのにポンドを使っている所	
65	60	1	そんな豆あったら、自分で使えばいいのに	
66	60	1	最初は疑っていたのち、家に変えると、魔法の豆だとはっきり言うジャック	矛盾
67	61	1	夜じゃなきゃだめ?	
68	61	1	最後まで説明していないのは何で?	
69	63	13	母の口調、息子に対する冷たさ・なぜ母親は、こんなにもジャックに厳しいのか?	
70	71	1	牛もいなくなって、お金もないのに、なぜ「とっとと寝ちまえな」なのか?	
71	65	1	ミルクキーホワイトは村で一番ミルクを出すのに、何故、母とジャックは貧しいのか?	矛盾
72	65	2	牛は一頭しか飼っていないはずなのに、うまい肉ができたのはおかしい	矛盾
73	65	3	うまい肉にできたなら、売らずに食べれば良かった	
74	65	4	どうしてうまい肉にできると知っていたのか	
75	69	1	豆は、放り投げただけで、育つか?	
76	69	1	窓の外に放り出した豆の数?	
77	69	3	どうして母は、豆を投げ捨てたか?	
78	69	3	食べるものが無いくらい貧しかったら、豆を外に捨てないで食べればよかったのに	
79	82	2	なんで窓から外を見るのより先に着替えたのだろうか?・服を着る前に、窓を見れば良い	
80	82	3	寝るときにジャックは服をきていないのか?・いつ服を脱いだのか?	◎
81	83	6	「そこで～思う?」「とにかく～わけさ。」の所が、いきなりせりふのようになっている・ストーリーなのに、「そこで一体、何が見えたと思う?」という読書への問いがある。急なジャック目線。いきなり話口調になったのはなぜか?	
82	84	9	どうして豆はたった一晩で急成長したのか?	
83	84	5	豆の木なのに、なぜ豆ができないか?(この学生は、どこでできないと判断したのか)	
84	84	2	どうして母が捨てた豆が芽を出したと思ったのか?	
85	84	1	外に投げただけなのに、豆の木が伸びたこと	
86	84	1	豆が天まで育った所で、ジャックはどうするのか?	
87	84	1	投げた豆の個数と、生えてきた木の数が違う	
88	85	1	無駄なかつつけ「～わけさ」	
89	86	1	その豆の木は窓のすぐ外に立っている→家に巻きつかないのか?	
90	87	1	豆を売るとか、(金にならなくても)育てるという考えは、浮かばなかったのか?	
91	87	1	ジャックはなんで豆の木に登ろうと思ったのか?	

92	87	1	天まである木を登ることは不可能	
93	88	3	天まで来てしまった→上限を何故決めたか? 天とはどこか?	
94	88	1	天まで登るのに、かかる時間が短かすぎる	
95	88	3	天? 天は空気が薄い気がする? 雲の上って落ちないのか?	
96	88	9	腹が減っていて、誰も雇ってくれないようなひ弱な少年が、なぜ天までよじ登れるのか? 小さい子どもが天まで登れる体力はあるのか?	
97	89	22	なんで雲の上(天)に道路や大きな家があるのか?	
98	90	1	天まで届いた所からの高い塔とあるが、先端の高さ?	
99	90	1	知らない雲の道を、なぜどんどん進んでいくのか?	
100	91	2	天の世界は、なんで巨大な物が多いのか?	
101	91	6	大きな女の人の正体は?	
102	91	1	人食い鬼とそのおかみさんは、どうやって天の上に存在しているのか?	
103	91	2	おばさん(大きな女の人)は、なぜここにジャックがいるのか、疑問に思わないのか?	
104	92	1	ジャックが大きな女の人に対して、恐怖心を持たないのは、なぜか?	
105	92	2	なんで大きな女に向かって、丁寧な言葉づかいで言ったのか?	
106	95	1	昨日の朝から何も食べてないだけでは死なない	
107	99	1	ジャックは帰らせようとしたのに、今まで丸焼きにされてしまった男の子は、どうしておかみさんが帰らせてあげなかったのか?	
108	100	1	人食い鬼と人が一緒に住んでいること	
109	100	1	うちの人は人食い鬼で→お前も鬼か?	
110	100	2	天に男の子は何人も来ていたのか・天に以前男の子が来たことがあるのか?	
111	100	4	人食い鬼やおかみさんの食料は、どこから得ているのか?	
112	100	1	「うちのひとは人食いで男の子の丸焼きほどの好物はない」→今でも食べていたのか? どうやって? 子供をどう集めていたのか?	
113	100	5	人食い鬼は、なぜおかみさんのことは食べないのか?・子は食べるけど、大人は食べないの?	
114	100	1	おかみさんが、もしかして人食いとジャックは考えないのか?	
115	100	1	どうして人を食うのか、なぜそんな男と結婚したのか?	
116	100	2	おかみさんは、どうして鬼と知り合いなのか・どうやって女の人は、鬼に仕えたのか	
117	100	1	大きな女は、なぜ自分の夫を人食い鬼と言えるのか?	
118	100	4	人食い鬼は、どこから帰ってくるのか?	
119	101	1	人食い鬼は、なぜ朝食の時間帯に帰ってきたのだろうか?	
120	100	1	天には神様がいらっしゃるが、なぜ人食い鬼なのか?	
121	108	2	悪い女ではなかった・なぜ悪い女だったと決めつけたのか?→何故分かる	
122	108	4	人食い鬼のおかみさんが優しい点・心優しいなら、金とかやって(食べ物も)すぐ帰らせればいいのか?	
123	109	1	おかみは、何故ジャックだけに情けをかけたのか?	
124	109	1	天にはパンやチーズがあるのか?	
125	109	1	パン、チーズ、ミルク、どれもミルクを使用。初めのミルクを出さなくなったミルクイーホワイトと何か関係が?	
126	110	1	巨人に出した食事なのに、人食い鬼が来る間に半分くらい食べられたのか?	
127	103	1	人食い鬼に食べられるかもしれない状況に居るのに、朝食を求め ジャック	
128	111	1	自分の家なのに、ぐらぐらす理由	
	計	401	備考: 86人の疑問数が401個なので、平均すると一人当たり4.7個になる。	

れない。次に、1頭だけでは生活ができるのだろうかというばかりではなく、乳は出にくいのではないかという疑問も生ずるだろう。人間の母親が乳を出すのは、赤ちゃんが生まれる場合であり、牛も常に妊娠状態でないと、乳を出さないことを考えると、牛1頭という疑問には、二つの解もあるだろう。

さて、本筋に戻り、特徴ある疑問点・不思議点を述べる。

整理番号30にみられる、そもそも子供一人に牛を売りに市場に行かせるのが、当時は当たり前だったということである。関連して、なぜ、母親自身が売りに行かなかったのかというのが整理番号29である。

度数が41と最大なのが、整理番号35の「おじいさんは、どうしてジャックの名前を知っているのか」である。本a文中(p.52)にも括弧付きで、同じ表現がある。解消編の本bでは、おじいさん

は魔法使いの指示で、ジャックの前に現れるようになっており、すべてがお見通しという立場が取られている。

ところで、整理番号35～38の老人がジャックに投げかける問いの不可解さがある。別の本では、「5つを隠すにはどのようにすればよいか」という質問があるので、口にくわえたり、両手に隠すことが分かる。それでも、どのようにして隠すかという質問は、どうして出されたかの疑問が残ろう。この問いに対する答えは、今後の課題である。

8 グループで出された疑問点・不思議点・矛盾点

ところで、度数は1と少ないが、整理番号63の市場に出かけたジャックは、途中で老人に出会い、不思議な豆を持って、家に引き返した場面からである。

「家に帰り着いても、まだ日が高い。『おや、もう帰ったのかい。ジャック』」と母親が声をかける。ところが、牛を売らずに、豆と交換してきたことを知り、母親は豆を窓の外に放り出してしまう。その場面で、『『えいっ！ぐずぐずしていないで、とっとと寝ちまいな。今夜は、おまえに、飲ますものも食わすものもありゃしないんだからね。』母さんはかんかんにおこって、どなりちらした』とある。

この箇所は読み方にもよろうが、時間経過が早くなっていると捉えれば、昼間だったものが、すでに、夜か夕方になっているという印象を与える箇所である。なお、大学生の場合には、この箇所についての指摘が多数あった。北欧における白夜との関連を考える必要が出てくる箇所であろう。

9 疑問点・不思議点・矛盾点の解消（本bの読後感想文の整理）

本aを読んで発見した疑問点・不思議点・矛盾点は、本bの読後にどの程度解消されたのか。

表2「本b（物語b）の読後に、本a（物語a）についての疑問点・不思議点・矛盾点は解消されたか」はその集計結果である。頁順にいくつかの

箇所について述べよう。

整理番号6の通り、母についての記述は度数が6である。母親は一生懸命に働いていたことが分かった。整理番号7の通り、「母は結婚しないのか」という新たな疑問が1つ生じた。

次に整理番号8の通り、極貧であったために、「ミルクが出なくなったのではなく、牛を売るしかなかった。」ことが分かった。これが度数7である。

牛についてはこの他、本aでは「ミルキーホワイト」だったが、本bでは名前がついていないことが分かった。また「牛は売らずに飼って、乳製品を売ればよいのではないか」や、末尾掲載資料本bのp.17の挿絵を見て「雌牛なのに角があるのか」という疑問が新たに出てきた。雌牛も雄牛も角があるにもかかわらず、こうした点についても、新たな問いかけがなされると、十分な答えが難しいということが分かる。

整理番号3の通り、ジャックが働かないわがままな遊び人だったことが分かったが、14個ある。母親の甘やかしもあった。「ニートだった」や「母親が優しい人と甘やかすとは関係ないのでは」という意見もあった。

整理番号9の通り、30人と最も度数が高かったのが、「老人は肉屋であった」である。

整理番号10は「豆は袋に入っていた」や「豆の色がさまざまだった」が合わせて10人、整理番号11は「交換理由」が5人あった。子供らしい興味が起こり、それを肉屋が利用している場面である。整理番号12や13は「豆の粒は10粒だった」が3人、それがはじけてどうして3粒しか生えなかったが2人、整理番号14は「肉屋はその豆が天に届くのを知らなかった」が一人であった。

整理番号15は「母親の怒り」の理由が分かったが3人。

母親が豆を食べずに、外に投げた理由が分かったという感想は一人であった。「火はないし、こなごなにする道具も無い」ためであった。

整理番号18は「豆の木になったのは、3本がからまって梯子のようになったから」が9人であっ

表2 本b(物語b)の読後に、本a(物語a)についての疑問点・不思議点・矛盾点は解消されたか				
整理番号	頁	度数	項目	本b『ジャックと豆の木』(大宮杉 1977) pp.8-37を読んで、本aについての問題点・不思議点は解消されましたか?
1	p.10	1	ポンド	イギリスが舞台だから、ポンド。
2	p.10	2	父親	なぜ父親が居ないか?
3	pp.10-16	14	Jわがまま	ジャックは甘やかされ、わがままで怠け者だった
4	pp.10-18	3	お母さんの怒り	お母さんは怒りんぼうではなく優しい
5	pp.15-17	3	牛	ミルクキーホワイトの名前がない? 牛の角? 売らない方が?
6	pp.12-14	6	母	母親は家事で手がいっぱい外で働けなかった
7		1	母新たな疑問	母は結婚しなかったのか?
8	pp.14-18	7	極貧	牛はミルクを出さなくなったのではなく、極貧のため最後に残った牛を売らざるを得なかった
9	p.19	30	肉屋	おじいさんは近所の肉屋さんだったから、ジャックの名前を知っていた
10	pp.21-23	10	豆の袋と色	豆は袋に入れており(7人)、様々な色をしていた(3人)
11	pp. 20-24	5	交換理由	ジャックは、ただ豆が綺麗で欲しいと思ったから、交換してしまった
12	pp.27-28	3	豆数	豆は5粒ではなく10粒ほどだったし、普通の大きさだった
13	p.34	2	豆数	10粒投げたのに、3粒しか生えなかったのか?
14	p.32	1	豆天届く	豆が天に届くのを、肉屋は知らなかった
15	pp.27-31	3	母の怒り	牛を豆と交換した時、母親があそこまで怒ったか分かった
16	pp.30-31	1	極貧	豆を焼くことも、潰すこともできないから、捨てた
17	p.34	1	服を着る	服の真相は分からなかった
18	p.34	9	豆の1本木	3つから芽が出て、絡み合って1本になっていた
19	pp.35-	4	登った理由	ジャックは豆の木のでっぺんがどこなのか気になったから、登った
20	p.37	3	空腹	木登りに夢中になったから、空腹を忘れた
21		1	その他	子供が居なかったから
	計	109		

た。本aの疑問と合わせると、母親が外に捨てただけでは、芽が生えないと思っている者や、豆の蔓がお互いに絡み合うということを知らない者もいるのではないかと思われる。

整理番号19や20は、登った理由として、てっぺんが見たかったからが4人、夢中になっていたために空腹を忘れたが3人あった。

解消されたことは、1)牛がミルクを出さなくなったためではなく、貧しかったから、2)おじいさんが近所の肉屋さんだったこと、3)ジャックは珍しい色の豆が袋の中にはいており、肉屋に取り替えるように仕向けられたこと、4)ジャックが登ったのは天井を見たかったから、5)空腹を忘れるほどの興味があったこと、6)豆の蔓が絡みあって太い一本の木になったこと、7)母が怒ったのは、ジャックがあまりにも家庭の経済状況を理解していないためといえる。

牛や豆についての理解はあやしい。衣服を着ていなかった理由については、解消されなかった。

ジャックが豆と交換した理由として、「天までのびる豆の木なら、どっさり豆がとれるにちがいないぞ」と明確に表現している読み物もある(ダックスインターナショナル 童音社 1977)。本aと本bでは、ジャックが牛と豆を取り替える理由は明確ではない。子供らしい関心の対象があることを見るべきだろうか。

10 感想文の意見に見られる実践の結果(以下は「/」で回答者を区別する)(なお感想文において、「物語a」は「本a」に、「物語b」は「本b」に表記を統一した)

10-1 [提示順序]

本の提示順序は、次の感想文にある通りである。本を読む前に、つまり出前講義を実施する前に、あらかじめ15分程度のDVD『ジャックと豆の木』を視聴してもらった。

「DVD, 本a、本bの3種類の『ジャックと豆の木』を見て読んだが、3つとも話が微妙に違っ

ているので、読み比べることで、分からなかった部分も分かるようになって、面白かった。疑問や矛盾点を探し、考えながら読むことで、より一層深くその文章について理解することが出来た。/事前にDVDで見た『ジャックと豆の木』と、今回出前講義で読んだ二つの『ジャックと豆の木』で、3つが3つとも違って、その点で面白かった。最近、近代文学のカバーやマンガ版がよく出版されているが、自分は読書が好きなので、そういうたぐいも読んでみたいと思った。いくつかの不思議な点は、結局余り解消されなかったが、いつもとは違う本の読み方をして、楽しいと感じた。『友達と一緒にできたことは、次に自分一人でもできる』という考えが凄いなと思った」

10-2 [対話的構成主義の実践と学びの原則の提示]

上述の通り、出前講義では、友達同志で意見を交換することを通して、友達の良さ、自分の考えの提示など、対話による交互作用を奨励することで、いわゆる対話的構成主義を実践することを話した。また、本の読み比べを進める中で、小グループを構成して、友達同志で話し合う場合の心構えとして、学びの原則の一つを提示した。それが上記引用にある「今日、何人かでできたことは、明日、一人でできる」という箇所である。学習は競争ではなく、協力する中から成立するという立場の強調である。

さらに出前講義とは称してはいながらも、講師がある項目について直接、講義をする形式ではなく、むしろ高校生自身に十分に時間を与えて自由に考えてもらう形式をとった。感想文は次の通りであった。

「意外だった。大学の紹介とか、教育のことについて講義をしようと思った。どうして『ジャックと豆の木』だったのだろうかと思った。いろんな意見が出て楽しめた。/自由な講義だったので、退屈せずに楽しくできた。子供の時に読んだ本でも、読み返してみれば、新しい発見があるということに気がついた」

10-3 [読み比べの全般的感想]

同じ書名の二つの本を読み比べる試みは、高校生には、どのように思われたのであろうか。出前講義を踏まえて、全般的な感想には次の通りである。「一つの物語をいろいろな本で見ると、分からなかった事も見えてきて、いままでやった事がなくて、新鮮な感じだった。とても楽しく話を聞いた。／普段の授業では、話し合ってお互いに意見を出し合う機会がなかなかないので、このようなやり方で、話し合うのもいいことだなあと感じました。読み比べてみると、話が違ったりすることもあって、面白いと思いました」

10-4 [物語『ジャックと豆の木』]

そこで、物語『ジャックと豆の木』についてはどうだったか。「はじめは、はっきり言って、『ジャックと豆の木』とかなんだ、とか思っていたが、講義はとても面白かった。これを期に、これからはマンガだけでなく、いろいろな本を読みたい。／2種の『ジャックと豆の木』を読んで、とても面白いと感じた。／『ジャックと豆の木』は、題名は知っていたけど、こんなに詳しい話は知らなかった。おととい見たアニメの『ジャックと豆の木』と、1枚のプリントの話と、最後に渡された話は、全部違っていたし、最後の話は他の2つと全然違っていった。それがとても面白いと思った」

10-5 [二つの本『ジャックと豆の木』]

それでは、同じ書名でも内容の異なる二つの『ジャックと豆の木』という本についてはどのような感想だったか。「音楽は、同じ曲を違う演奏者のものとかを何種類もやることもあるが、本は初めてだった。読み流してしまうようなことも、少し考えれば、不思議なことがたくさんあって、楽しかった。／同じ話でも、出てくる人は（性格が；引用者の補足）違ったりするんだと思いました。書く人で色々違ってくるんだと思いました。／同じ物語でも、書く人やその時代に合わせたりして、内容が簡単になったりしているんだと思いました。／同じ物語でも、古いものと新しいものでは、

こんなに物語が違うことに驚いた。／ほとんどのストーリーは同じなのに、大宮杉（文）のほうが、読んでいて面白かった。書く人によって、物語がかなり違ってくるということが分かった。自分でも本を読むときに、違う著者のものも読んでみたいと思った」

10-6 [物語が童話である]

「童話を改めて読んでみると、不思議な点がたくさんあるかなあと感じた。現実的に考えると、スケールが大き過ぎて、現実味がない話なんだなあと思えるのは、自分が大人になったからだなあと感じた。／今まで童話を読むときは、細かいことは気にしないで読んでいたが、そういう細かいところに、目を向けて読んでみると、不思議なところや、矛盾点が結構あって、これから本を読むときは、そういうところにも目を向けて読んでみようと思った。／今まで、『ジャックと豆の木』を読んだ時に、疑問点や不思議な点を考えたことが無かったけれど、それを考えながら、読んでみると、たくさん疑問点、不思議な点が出てきたので、楽しみながら、やることができました。／今回、類似した『ジャックと豆の木』を読んでみましたが、同じ話なのに、内容が全く違ったり、内容を読んでから疑問点などを出してみると、結構、奥が深いんだなあと思いました。今回読んだのは、高校生ではまず読むことはないような本でしたけれど、自分は本を読むことがないので、本を久々に読めて良かったです。今日のような類似した本を読み比べるのは、読んでいて読むスピードも、理解力も上がると思うので、できることなら個人的に続けていきたい」

10-7 [問題点・不思議点・矛盾点を念頭にした読書方法]

[本aと本bの読み比べ（問題点・不思議点・矛盾点を求めて）]

「初めは疑問点なんて、そんなに思い浮かばないのではないかと思いましたが、じっくり物語と向き合ってみると、不思議なことがいくつも出て

きました。他のチームの発表で、◎をもらっていた疑問は、確かに言われてみると、凄く不思議に思えるものだったし、深いなと思いました。楽しかったです。／『ジャックと豆の木』が、こんなにたくさん疑問があつて、深い話だとは、思いませんでした。同じ題名でも内容が全く違っているのも驚きました。少し注意を払って読むだけで、物語の世界が広がるのは、とても新鮮で楽しかったです。これからは、もっと注意を払って本を読みたいと思いました。／『ジャックと豆の木』の疑問点を出し合い、自分では気づかないところに、着眼点があつて、聞いて面白かった。本aは、バツサリ書いていて、よく分からないことがあつたが、本bでは、丁寧に書いてあるので、疑問点が解決して楽しかった。／『ジャックと豆の木』は、ただジャックが天まで届く豆の木に登って、人食い鬼の宝を奪うというイメージだったが、ミルクィホワイトという牛がいて、ジャックは2回も豆の木に登って行ったことは事前に知って納得していたのが、まさか、ジャックは怠け者で、母さんは優しく、老人が肉屋さんだったとは思いませんでした。たかが、絵本だと思いましたが、読んでみると、意外と奥深く、矛盾と疑問が湧き出てきました。自分たちで探して、見つけて、疑問が解消されて、楽しかったです。／『ジャックと豆の木』のお話を読んで、最初に渡された本aと、後に渡された本bは、お母さんの態度とか、男の子がわがままであるとか、どちらも違うなあとと思いました。／同じ物語でも、それぞれ書き方の違う本を読むと、もっと違った視点から考えさせられた。今日の、『ジャックと豆の木』の場合では、最初の本aでは、牛がいくらで売れるのかも分からないうちに、唯一の収入源を売ってしまおうと言ったことを、疑問に感じたけれど、次の本bでは、ジャックが怠け者で、お金を得るためには、最終的に牛を売ることにしかなかったということが分かったし、豆と取り替えた老人も、本bでは、少し悪い感じの人に思えて、物語はちゃんと読んでいくと、考えさせられたり、みんなと話し合うと、思うところが多くて、深いなあ、

と思った。／今回、同じ題目の二つの物語を読んで、表現の違いや書き方に、凄い違いが見られて楽しかった。本aでは、お母さんがあまり可哀相ではなかったけれど、本bだと、お母さんがとっても可哀相で、どんどん物語にのめり込んでいった。ただ、何となく本を読むだけではなくて、こうやって自分で疑問点を見つけて、解決すると、なんかすっきりして楽しかった。昔話に疑問を持つという考えが、なんか新しくて難しかったけれど、この体験のように、伝えたいこととか、教えたいこと、疑問に思うことは、人それぞれなのだと分かって、教育って・・・何かぼ～っと考えたりした。／同じ内容の作品でも、本が違うことで解釈が変わり、初めに読んだ方の補足がされていたり、全く違うことが書かれていて、面白かった。普段、本を読んで疑問を持つことはあまりないので、疑問を持ち、深く読んで、解決して、より深い理解をしていければ良いと思う。／同じ物語でも、登場人物が違ったり、性格が違ったり、展開が違ったりで、読んでいて楽しかった。また、人によって観点が違ったので、色々な疑問が出てきて驚いた。友達とグループになって意見を出し合うことで、自分と違う意見があつたので、勉強になる部分もあつた。もっと本を読んで心を豊かにしたいと思った。／とても楽しい講義でした。同じ話なのに、本によって全く違った見方ができるんだなと思い、面白かったです。／物語に対して、様々な疑問を投げかけるやり方は、『あっ、そうですか』と、ただ作品を受け取るだけよりも、数段頭を使って良いなと思った。子供の頃、そんなふう疑問を持って読んでいたなあ、と思い出した。もしも自分の子供に、『どうして？ どうして？』と聞かれ続けたら、読み聞かせどころじゃなくなるし、途中で嫌になって、放り出してしまふ気がする。幼い時は、何にでも疑問を持っていたのに、なんで今は、ああならなかったんだろう。そして、このディスカッションは、知らない人と意見を交流できる良い方法だと思う（引用者注：出前講義では別なクラスから集まってきた生徒達が対象だったことによる）。思うけれど、

最近そういう風なことをしていなかったの、死ぬほど辛かった。本当、子供の頃に戻りたい。／矛盾点などを見つけることは、とても面白かったです。そこから、また話を広げると、新たな世界が見えてくる感じがとても面白かったです。またやってみたくて思いました。／今日やったような読書の仕方は、今までにやったことがなかったので、凄く面白かった。また、疑問点を見つけることで、一つの本により深く入り込めた気がする。『ジャックと豆の木』が、このような話だったなんて驚いた。／本を読む時に、『どうしてだろう?』と思うことはあっても、それを解決しようという目的で読み進めるわけではなかったので、今回のように、深く深く読み進めるのも楽しいなあと思った」

10-8 [同じ書名の本の読み比べ法の長所と短所]

それでは、このように2種類の本の読み比べをすることについて、課題として疑問点・不思議点・矛盾点を探させてみる場合の長所と短所についてみてみよう。

10-8-1 [長所]

「物語を読んで、疑問点や不思議な点をあげることは、初めてやったので、新しい感覚だった。／同じ物語なのに、内容が違って、面白かった。／同じ話なのに、内容が少し違うところがあって、楽しかった。／同じ話でも設定が大きく違ったりすることが分かり、他の物語も読み比べをしてみたいと思った。／同じ話でも、表現の仕方、全く違う話になるのだなと思った。／同じ物語を2つの違う本から読んでみて、こんなに差があるんだと思った。とても興味を持つことができた。／

2つの物語を読んで、違いに驚きました。主人公やその母の性格、出てくる登場人物の設定も違っていたので、同じ『ジャックと豆の木』でいいのかと思いました。もっと他の作品でも、このような違いを見つけてみたいです。／本aの方は、疑問点が多く出てきて、周りの人の意見を聞いたら、さらに深く考えることができた。本bを読ん

だら、より詳しい状況が出てきて、私は、こちらの方が読んでいて話が分かるが、もし子供に読み聞かせをするならば、本bの方が、場面場面で構成してあるので、良いのではないかと思った。／同じ物語なのに、全然違う内容だった。目的は同じだが、こういう違いを考えるのも面白そうだ。想像力が豊かになる。自分の中で話を発展させるのが、面白いと気づいた。友達と一緒に頑張ることが大切ですね。／同じ物語でも、本によってちょっとずつ表現や内容が違っていたところが、面白いなと感じました。こういうふうには、本を読んだことが無かったので、とても新鮮でした。自分でも、違う本で読み比べをしてみたいと思いました。／類似した物語を読むことで、分からなかった点分かる部分もあり、とても興味を持つことができた。今日は『ジャックと豆の木』であったが、今度は自分で類似した物語を読みたいと思った。本を読んで行くなかで、疑問点や不思議な点を挙げて読んでみると、面白いかと思った。／『ジャックと豆の木』について、ここまで深く考えたことは、今まで、一度もありませんでした。今回、この講義を受けて、いつも読んで終わりだった物語が、疑問点や不思議な点を考えることによって、さらに物語の内容を深めていけることが、分かりました。／本の深さを知ることができた。本を読む時に、色々な疑問を持って読みたい。／本を読んだ時に、こんなに内容につこんで読んでいなかったの、面白く読めた。同じ作品なのに、違うようなことが書いていて、驚きでもあった。友達とやることは良いことなので、読み続けたい。／今日の講義では、普段何気なく読む小説などを、真剣に考えれば、不思議な点はいっぱいあると思った。／一つの物語をいろいろな本で見ると、分からなかった事も見えてきて、いままでやった事がなくて、新鮮な感じだった。とても楽しく話を聞けた。／とても楽しく興味をもってやることができた。本を読むことはとても大切なことなのだということが分かった。／本を読む楽しさを教えてもらいました。これからもたくさん本を読んでいこうと思います。コミュニケーション

をとるのに、とても重要なことだと思いました。とてもためになりました。／ちゃんとした方を読んだら、疑問が解決した。／凄く楽しかった。同じ話でも、書き方が違って、いろんな場合があって面白かった。細かく読むと、奥が深いと思った。／常に本を読みながら、疑問点や不思議な点を探しながら読むということは、とてもいいなと思いました。これからも本を沢山読んでいきたいと思うような講義でした。／次への活動に繋がる活動であった」

10-8-1-2 [疑問点・不思議点の書き出し]

「本を読んで思ったことを書き出してみるの面白いと思った」

10-8-2 [短所]

「一つの物語を違う見解を持った作者の話を読み比べると、楽しさが少し分かった。しかし、このやり方を続けたくないと思ったのは、一番最初に読んで感じた良い感想が崩れてしまう可能性があるから。／本を読む事は楽しくて好きだけでも、類似した作品を読む事で何が正しいのか、何を伝えたいのか、何だか分からなくなる事に気づいた」

10-9 [小グループ活動]

普段高校の授業では実施していないことから斬新さから引用する。

「普段の授業では、話し合ってお互いに意見を出し合う機会がなかなかないので、このようなやり方で、話し合うのもいいことだなあと思いました。読み比べてみると、話が違ったりすることもあって、面白いと思いました。／自分で疑問点を見つけたり、それをグループやみんなの前で、発表したりして、普段は余りできないようなことができたので、良い経験になったし、とても楽しく講義を受けることができました。／グループでの話し合いなど、普段しないことをすることができました。／グループでの話し合いで、自分が考えないことなどを、みんなが考えていることが分か

りました。／グループ内のディスカッションも普段あまりやらないことでしたし、いろんな意見が出て、自分も勉強になったし、グループ活動の楽しさも同様に知ることができました。自分以外の人の意見を聞くのは、とても面白かったです。／今回の講義で、グループワークをすることで、自分とはまた違った視点の考えがたくさん出たので楽しかったです。／グループを組んで、友達で意見を言い合って、まとめるのが面白かった。／自分の中だけでは、疑問にならなかったことが、話し合うことで、新しく見えてきて、面白かったです。／様々な人と意見を交換すると、もっと面白いと感じた。／グループで話し合いながらのものだったため、楽しみながら受けることができた。／友達と疑問点について話し合うことで、自分では気づかなかったことにも気づけて、面白かったです。／友達と意見を交換することで、全く気にも止めていなかったことが、実は重要だったことに気がついたり、自分の疑問点がより深まった。そうした上で、類似した物語を読むと、最初に読んだ話が、更に面白いと感じることができた。／この話の疑問点について、みんなで話し合ってみて、自分が気づかない疑問点にも、いっぱい気づくことができたし、沢山考えることができて、楽しかったです。／一つの作品でも、本によっては話の内容が少し違ってくのが不思議に思った。複数の人たちと作業をすると、一人では見つからなかった考えがあった。／グループ活動によって、自分が気づかないことを新たに発見することができて、これがこれからの受験や試験にも繋がるのだと聞いて、なるほどなと思いました。／グループで話し合うと、友達の意見も聞けて、様々な考えがあるんだと思えた。／自分と同じ意見が出て、納得したり、またそれに対して、全く思いつかなかった意見が出て、『なるほど!』と思ったり、考えが広がっていくことに面白さがあると思った。／グループ内のディスカッションも普段余りやらないことでしたし、いろんな意見が出て、自分も勉強になったし、グループ活動の楽しさも同様に知ることができました。自分以外の人の意見を聞

くのは、とても面白かったです」

10-10 [グループ間活動]

黒板にグループ意見を掲示して、講師の判断で得点を付けた。

「チームやグループで意見を発表し合うことで、自分一人では考えつかないことも、一緒に考えることができ、面白かった。／グループで考えを出すと、自分にはない考えが出てくるので、新しい世界が広がった。／グループで一緒にやることは良いことだと知ったので、これからいろいろ今回の取り組みを生かしていきたい。／自分では気づかなかったことも、グループで話し合ったり、他のグループの話を知ると、新しい意見があって面白かった。／友達同士で発表をすると、自分と同じことを考えている人もいれば、自分が思いもつかないようなことを考えている人もいて、勉強になりました。／今回の出前講義では、疑問点、不思議な点を自分で思っていることを発表でき、また、不思議な点も解消することができたので、良かったと思いました。それと、みんなで意見を出し合うことで、より問題に対して頭を働かせることができたので、良かったと思います。／グループごとに発表すると、自分では気づかなかったようなことも分かるので、楽しかった。また内容の違う一つの物語を読みたいと思った」

11 考察 (今後の研究課題)

11-1 検討課題1 [原文の取込み]

今回使用した訳本に関連して、大学生から原文を取り上げる必要性について指摘があった。二つの本の読み比べばかりでなく、原文にまで読みを広げることで、より興味をもてる読み比べが可能になるのではないかというのである。

大宮訳『ジャックと豆の木』の粗筋は、福原麟太郎訳(1954)と同じなので、福原か、あるいは福原が解説欄で示すハートランド編『イングランドの童話民話集』に依拠したものではないかと思われる(注)。原文についての検討は今後の課題である。なお、参考文献で列挙したものは、市販さ

れた児童向けの読み物が中心であることをお断りしておきたい。

11-2 検討課題2 [段階別調査の試行]

今回の調査は、本aを読んだ直後と、その後のグループ活動と続く本bを読んだ直後との2回で実施した。今後は、各段階ごとに調べるの方が、研究上は、よりよく細かいデータが得られるのではないかとと思われる。つまり、(1) DVD視聴後、(2) 本aを読んだ直後、(3) 問題点・不思議点を個人で書き記した直後、(4) グループに分かれてメンバーと意見交換をした直後、(5) グループとして疑問点・不思議点をまとめた直後、(6) グループ対抗でそれらを黒板に掲示してクラス全体で論じた直後、そして最後に(7) 本bを読んだ直後、などである。あまり細かい段階での調査が無理な場合には、3段階程度に絞ることも必要かもしれない。

11-3 検討課題3 [北欧神話における巨人の意味]

物語の創作された文化的・歴史的背景を、神話や昔話という視点ばかりでなく、実際の民族移動といった視点から知る必要があるだろう。たとえば、大男である人食い鬼やそのおかみさんの存在、なぜに大男と見なされるのか。誰にとっての大男なのか、どの人種にとっての大男なのか。在外生活後、成田に降りた時に感ずる、日本人の身長の高さから感ずる、西洋人の大きな体躯。民族移動により、制服する民族と制服される民族の視点からの課題である。

他方、民話・神話における象徴としての巨人。神と対峙する巨人なのか、あるいは「巨人は荒々しい北方の自然をあらわしているのでしょうか」(谷口幸男 1996 p.313)。

引用・参考文献・補足・注

ダックスインターナショナル 1977 ジャックと豆の木/まんが世界昔ばなし第45巻・テレビカラーえほん第45巻 童音社(本文は全部で31頁、解

- 説大石真, 「ある日とつぜんに、め牛のおちちがでなくなりました」(p.3)
- DVD ワールド・ピクチャーズ 白土武作画・監督 フランダースの犬・ジャックと豆の木23分
- DVD 大創産業 ジャックと豆の木(最初に発売されたこの2か国語のものを本研究では使用した)
- DVD 大創産業 ジャックと豆の木/語学を学ぶ世界童話シリーズ4, アニメDVD +おはなしCD キープ株式会社 2004 ジャックとまめの木/はじめてのえいご・めいさくどうわ③(日本語アニメ訳10分、英語アニメ約10分)(日本語朗読約14分、英語朗読約13分)
- DVD ビーンストーク/ジャックと豆の木 ブライアン・ヘイソン監督 2001年/アメリカ 日活株式会社(発売元・販売元) 189分
- 福原麟太郎訳 1954 ジャックと豆の木 創元社 Pp.41-53「おまえが働きもしないで、むだづかいばかりするから、こんなに貧乏になってしまったのだよ」(p.41) (pp.389-397解説/福原麟太郎「イングランドの話は、ハートランドの編集した、『イングランドの童話民話集』を主とし」(p.389))
- 早野美智代 1992 ジャックとまめのき/名作えほんライブラリー フレーベル館(本文は全部で27頁)「ジャックの いえは びんぼうであるひ とうとう たべるものさえ なくなりました。そこで、かあさんと そうだんして めうしを うることに きめました」(p.2)
- 平田昭吾 1986, 1993 ジャックと豆の木/名作アニメ絵本シリーズ(30) 永岡書店(本文は全部で45頁)「ある日、うしがちちを ださなくなりました」(p.1)
- 平田昭吾 1989, 1992 ジャックとまめの木/よい子とママのアニメ絵本 通巻No.39号せかいめいさくシリーズ ブティック社(本文は全部で46頁)「だいな うしが年をとり ミルクがでなくなりました」(p.1)
- 本城和子訳・再話/ジェイコブズ 1989 ジャックとまめの木/イギリスのどうわ(偕成社 世界のどうわ18) 偕成社, Pp.1-55「ある朝、このシロが ちっとも ミルクを ださなくなったので」(p.3)
- 岩崎京子 1995 ジャックとまめのき 村山貞雄責任編集・岩崎京子編 イギリスみんわ/ママ、よんでⅧ 株式会社サンマーク Pp.2-31「あるあさ、うしのおちちが ぱったり とまり、でなくなりました」(p.2)
- こだまともこ訳・ジョゼフ=ジェイコブズ著 1980 ジャックとまめの木/世界のメルヘン4 イギリス童話(1) 講談社 Pp.5-25, 解説 神宮輝夫 Pp.114-117, 「ある朝、ミルキー=ホワイトは、ひとしづくもちちをださなくなっていました」(p.6)
- 三宅忠明 1978 ジャックと豆の木ほか/世界の民話<2>イギリス編 家の光協会 Pp.50-71, 解説 pp.194-204「ある朝、ミルキーホワイトがぱったりミルクを出さなくなった」(p.50)
- 西本鶏介 1988, 1996 ジャックと豆のつる/こども世界名作童話29 ポプラ社 Pp.4-37「ある朝、”まっしろ”のミルクがでなくなりました」(p.6)
- 大宮杉 1977 ジャックとまめの木/学年別(一・二年) 児童名作文庫(215頁) 日本書房「だいにしていた、め牛を うらなければ、パンをかう お金も なくなりました」(p.15)
- 小沢正 1988, 1991 ジャックとまめのき/チャイルド絵本館/世界の昔話2 チャイルド本社(本文は全部で38頁)「ジャックの いえは びんぼうで、のこっているものと いったら、めうしが たったの ひとつだけ」(p.5)
- 塩谷太郎訳 1961 ジャックとまめの木 中野好夫訳者代表 少年少女世界文学全集4 イギリス編 第1巻 講談社 Pp.307-315, 解説 pp.400-407. 「ある朝、白はさっぱりうしの乳をださなくなりました」(p.307))
- 谷口幸男 1966 解説 P.コラム作・尾崎義訳 2001(新版)(1955初版) 北欧神話 岩波書店 Pp.309-314
- VHS 劇団飛行船 1990 ぬいぐるみ人形劇『ジャ

- ックと豆の木』日本ビクター53分
 VHS 株式会社コアラブックス ジャックとまめ
 の木／世界の童話あいうえおアニメ
 Woolfolk, A.E., P.H.Winne & N.E.Perry 1998
 Educational Psychology, Canadian Edition, Allyn &
 Bacon Canada, Scarborough, Ontario.
 八木田宜子訳 1979 ジャックとまめのつる／こど
 ものための世界名作童話8 集英社 Pp.28-74,
 「ある あさ、“ミルクいろ”は ミルクを だし
 ませんでした」(p.30)(同著者 解説 pp.75-77)(ジ
 ェイコブズ (1854~1916) オーストラリシのシ
 ドニー生まれ、ユダヤ人)
 柳川茂・ジェイコブズ作 2008 ジャックとまめの
 木／世界名作アニメ絵本^⑩ 永岡書店 (本文は
 全部で46頁)「うる ものもなくなって、のこっ
 ているのは一とうのめうしだけになってしま
 いました」(p.3)
 吉田新一郎訳・ジェニ・ウィルソン&レスリー・
 ウィング・ジャン 2004 「考える力」はこうし
 てつける 新評論 p.23

注) 英文の『ジャックと豆の木』は、2011年3月
 現在、Hartland (1890) のものはWEB上の
[http://www.sacred-texts.com/neu/eng/efft/efft06.](http://www.sacred-texts.com/neu/eng/efft/efft06.htm)
 htm で、English Fairy and Other Folk Tales の中
 にあるJack and the Bean-stalkに掲載されている。
 As she was not wealthy, and he would not work, she
 was obliged to support herself and him by selling
 everything she had. At last nothing remained only
 a cow.

他方、Jacobs (1890) のものも WEB 上の
<http://www.sacred-texts.com/neu/eng/eft/eft14.htm>
 で、English Fairy Tales の中にある Jack and the
 Beanstalk に掲載されている。THERE was once
 upon a time a poor widow who had an only son
 named Jack, and a cow named Milky-white. And all
 they had to live on was the milk the cow gave every
 morning, which they carried to the market and sold.
 But one morning Milky-white gave no milk, and
 they didn't know what to do.

資料1：ジャックと豆の木（三宅忠明 1978）

p.50-----

- 01/むかし、貧しいおかみさんがいた。
- 02/だんなを亡くしたあと、ジャックというむすこ二人でくらしていた。
- 03/白乳号(ミルク-ホワイト)というめ牛を一頭飼っていたが、このめ牛からしぼるミルクを市場に売りに行き、そのお金でほそぼそとくらしていた。
- 04/ところがある朝、ミルク-ホワイトがぼったりミルクを出さなくなった。
- 05/ミルクが出ないと、パンをつくる金もできない。
- 06/「どうしたものかね。どうしたものかね。」
- 07/ と、母さんはこぶしをにぎりながらいった。
- 08/そんな母さんを見て、ジャックはなぐさめるようにいった。

p.51-----

- 09/「元気をだしてよ、かあさん。
- 10/ 心配しなくてもいい。
- 11/ ぼくが、どこかにはたらきに出るよ。」
- 12/「そういったって、おまえをやとってくれる者など、いやしないよ。
- 13/ いつかもそうだったじゃあないか。
- 14/ しかたがない。
- 15/ ミルク-ホワイトを売って、そのお金を元手に、何か商売でもはじめようよ。」
- 16/「それがいいよ。
- 17/ そういえば、きょうは市の立つ日だったね。
- 18/ ぼくがミルク-ホワイトを売ってくるから、あとのことはそれから考えようよ。」
- 19/ と、ジャックがいった。
- 20/ジャックは、め牛の手綱(ヌヅナ)をとって、市場(イバ)へ出かけていった。
- 21/いくらも行かないうちに、変わった身なりの老人(ロウジン)に会った。
- 22/「おはよう、ジャック。」
- 23/「おはよう、おじいさん。」

p.52-----

- 24/返事をしてから、ジャックはふと、(どうして、おいらの名まえを知っているのかな。)と、ふしぎに思った。
- 25/「ところでジャック、どちらへお出かけかね。」
- 26/ と、老人がたずねた。
- 27/「市場へ、この牛を売りに行くところだよ。」
- 28/「なるほど、牛を売りにねえ。
- 29/ ところで、豆を五つ持つにはどうすりゃいいのかな。」
- 30/老人はみょうなことをたずねた。

資料1：ジャックと豆の木（三宅忠明 1978）

p.50-----

- 01/むかし、貧しいおかみさんがいた。
- 02/だんなを亡くしたあと、ジャックというむすこ二人でくらしていた。
- 03/白乳号(ミルク-ホワイト)というめ牛を一頭飼っていたが、このめ牛からしぼるミルクを市場に売りに行き、そのお金でほそぼそとくらしていた。
- 04/ところがある朝、ミルク-ホワイトがぼったりミルクを出さなくなった。
- 05/ミルクが出ないと、パンをつくる金もできない。
- 06/「どうしたものかね。どうしたものかね。」
- 07/ と、母さんはこぶしをにぎりながらいった。
- 08/そんな母さんを見て、ジャックはなぐさめるようにいった。

p.51-----

- 09/「元気をだしてよ、かあさん。
- 10/ 心配しなくてもいい。
- 11/ ぼくが、どこかにはたらきに出るよ。」
- 12/「そういったって、おまえをやとってくれる者など、いやしないよ。
- 13/ いつかもそうだったじゃあないか。
- 14/ しかたがない。
- 15/ ミルク-ホワイトを売って、そのお金を元手に、何か商売でもはじめようよ。」
- 16/「それがいいよ。
- 17/ そういえば、きょうは市の立つ日だったね。
- 18/ ぼくがミルク-ホワイトを売ってくるから、あとのことはそれから考えようよ。」
- 19/ と、ジャックがいった。
- 20/ジャックは、め牛の手綱(ヌヅナ)をとって、市場(イバ)へ出かけていった。
- 21/いくらも行かないうちに、変わった身なりの老人(ロジソ)に会った。
- 22/「おはよう、ジャック。」
- 23/「おはよう、おじいさん。」

p.52-----

- 24/返事をしてから、ジャックはふと、(どうして、おいらの名まえを知っているのかな。)と、ふしぎに思った。
- 25/「ところでジャック、どちらへお出かけかね。」
- 26/ と、老人がたずねた。
- 27/「市場へ、この牛を売りに行くところだよ。」
- 28/「なるほど、牛を売りにねえ。
- 29/ ところで、豆を五つ持つにはどうすりゃいいのかな。」
- 30/老人はみょうなことをたずねた。

31/「両手に二つずつと、口に一つくわえるさ。」

32/ジャックは、すかさず答えた。

33/「ワッハッハ、こりゃあいい。

34/ さあ、これがその豆だ。」

35/とって、老人はポケットから、めずらしい色をした豆をいくつぶか取り出した。

36/「おまえはなかなかこうものだから、その牛とこの豆ととりかえてやってもいいが、
どうかね。」

p.53-----

37/「いいかげんにしてくれよ。

38/ そんなこと話にもなにもなりやしない。」

39/「おっと待った。

40/ おまえさんは、これがどんな豆だか知っているのかい。

41/ こいつをまいて一晩おくと、つぎの朝には天までとどいているんだよ。」

42/「まさか。

43/ そんなことってあるもんか。」

44/「いや、ほんとうだとも。

45/ もし、わしのいうことがうそだったら、牛は返してあげようじゃないか。」

46/「よし、そんならとりかえよう。」

47/ジャックは、ミルクィホワイトの手綱を老人にわたし、かわりにいくつぶかの豆を受け
取った。

48/ジャックは、そのまま家にひきかえした。

49/市場まで行かなかったの、家に帰り着いても、まだ日が高い。

50/「おや、もう帰ったのかい。ジャック。」

51/ と、母さんがいった。

p.54-----

52/「ミルクィホワイトをつれてないところを見ると、売れたんだね。

53/ で、いくらだった。」

54/「かあさんには当たりっこないよ。」

55/「じらすんじゃないよ。

56/ さあ、いい子だから教えておくれ。

57/ 五ポンドかい、それとも十ポンド、十五ポンド・・・、まさか二十ポンドってことは
ないだろうけど・・・。」

58/「当たりっこないっていったらう。

59/ ミルクィホワイトは、この豆ととりかえたんだから。

60/ この豆はすごい魔法の豆なんだよ。

61/ まいて、一晩おくだけでね・・・。」

62/ 「な、なんだって!

63/ おまえがそんなおおばかのできそこないだったとは、きょうのきょうまで知らなかったよ。

64/ あのミルクーホワイトをこんなくだらぬ豆ととりかえてくるなんて。

65/ あれは村じゅうでいちばんよくミルクを出したし、うまい肉にだってできたってのに。

66/ もう、かってにおし。

67/ あーあ、これでおしまいだよ。

68/ こんな豆がなんだい。

69/ 窓の外にほうり出しちまえっ!

70/ えいっ!

71/ ぐずぐずしてないで、とっとと寝ちまいな。

72/ 今夜は、おまえに、飲ますものも食わすものもありゃあしないんだからね。」

73/ 母さんはかんかんにおこって、どなりちらした。

p.55-----

74/ ジャックはしかたなく、屋根裏にある自分の小さなへやにあがっていった。

75/ なんとといっても、母さんにわかってもらえないのがくやしかった。

76/ それに、腹がへってたまらない。

77/ (ごはんを食べさせないなんてあんまりだ。)

78/ と思ったが、つかれていたの、そのうちに眠りこんでしまった。

79/ ふと目がさめてみると、へやがなんとなくおかしなぐあいだ。

80/ 日がさしこんではいるのに、へやぜんたいが、なんだかうす暗くて、何かのかげになっ
ているように見える。

81/ ジャックはとび起きた。

82/ いそいで服を着ると、窓ぎわに走り寄った。

83/ そこでいったい何が見えたと思う?

84/ なんと、ゆうべ、母さんが窓の外にすてた豆が芽を出し、一晩のうちに天までとどいて
いたのだ。

p.56-----

85/ とにかく、あの老人のいったことは、うそではなかったってわけさ。

86/ しかも、その豆の木は窓のすぐ外に立っている。

87/ ジャックは窓からのり出すと、その木にとびうつり、どんどん登りはじめた。

88/ どんどん、どんどん、登っていくうちに、とうとう天まで来てしまった。

89/ ふと見ると、目の前に広い道路がまっすぐにのびている。

90/ そこで今度はその道を、どんどん、どんどん進んでいくと、高い塔のある、とてつもの
く大きい家があった。

- 91/戸口には、これまたびっくりするほど大きな女のひとが立っている。
- 92/ジャックは、その女のひとの前に進み出ると、ていねいなことばづかいでいった。
- 93/「おばさん、おはようございます。
- 94/ 何か朝ごはんをいただけませんか。」
- 95/なにしろ、ゆうべから何も食べていないのだから、もうおなかがぺこぺこだ。
- 96/すると、大きな女がいった。
- 97/「なに、朝めしがほしいだって。
- 98/ とんでもない。
- 99/ 早くどこかに行っちゃまわないと、朝めしにされるのはおまえのほうだよ。
- p.57-----
- 100/ うちのひとは人くい鬼で、男の子の丸焼きほどの好物はないんだからね。
- 101/ さあ、早く行かないと、うちのひとが帰ってくるよ。」
- 102/これを聞くと、ジャックはからだがふるえるほどびっくりした。
- 103/それでも、おなかがすいていたので、熱心にたのみこんだ。
- 104/「おねがい。
- 105/ おばさん、きのうの朝からなんにも食べていないんですよ。
- 106/ このまもうえ死にするくらいなら、丸焼きにされたほうがまだましです。」
- 107/大きな女も、さすがにジャックがかわいそうになった。
- 108/この人くい鬼のおかみさんは、もともとそれほど悪い女ではなかったのだ。
- 109/おかみさんはジャックを台所につれていくと、パンとチーズのほかにミルクまで出してくれた。
- 110/ところが、ジャックがその食事の半分も食べないうちに、ドシン、ドシン、ドシンと、ものすごい足音が聞こえてきた。
- 111/その足音に合わせるように、家がぐらぐらゆれだした。

(本 a 三宅忠明/文 1978 ジャックと豆の木 家の光協会)

ジャックと豆の木



50

むかし、貧しいおかみさんがいた。だんなを亡くしたあと、ジャックというむすこと一人であらしていた。白乳号というめ牛を一頭飼っていたが、このめ牛からしぼるミルクを市場へ売りに行き、その金でほそほそとくらしていた。

ところがある朝、ミルク・ホワイトがぼったりミルクを出さなくなった。

ミルクが出ないと、パンをつくる金もできない。

「どうしたものかね。どうしたものかね。」

と、母さんはこぶしをにぎりながらいった。そんな母さんを見て、ジャックはなぐさめ

るようにいった。

「元気をだしてよ、かあさん。心配しなくてもいい。ぼくが、どこかにはたきに出るよ。」

「そういつたって、おまえをやとってくれる者など、いやしないよ。いつかもそうだったじゃあないか。しかたがない。ミルク・ホワイトを売って、そのお金を元手に、何か商売でもはじめようよ。」

「それがいいよ。そういえば、きよりは市の立つ日だったね。ぼくがミルク・ホワイトを売ってくるから、あとのことはそれから考えようよ。」

と、ジャックがいった。

ジャックは、め牛の手綱をとって、市場へ出かけていった。いくらも行かないうちに、変わった身なりの老人に会った。

「おはよう、ジャック。」

「おはよう、おじいさん。」

返事をしてから、ジャックはふと、(どうして、おいらの名まえを知っているのかな) と、ふしぎに思った。

「ところでジャック、どちらへお出かけかね。」

と、老人がたずねた。

「市場へ、この牛を売りに行くところだよ。」

「なるほど。牛を売りにねえ。ところで、豆を五つ持つにはどうすりゃいいのかな。」

老人はみよりのことをたずねた。

「両手に二つずつと、口に一つくわえるぞ。」

ジャックは、すかさず答えた。

「ワッハッハ、こりゃあいい。さあ、これがその豆だ。」

といって、老人はポケットから、めずらしい色をした豆をいくつぶん取り出した。

「おまえはなかなかこらものだから、その牛とこの豆ととりかえてやってもいいが、どうかね。」

「いいかげんにしてくれよ。そんなこと話にもなにもなりやしない。」

「おっと待った。おまえさんは、これがどんな豆だか知ってるのかい。こいつをまいて一晩おくと、つぎの朝には天までとどいてるんだよ。」

「まさか。そんなことつてあるもんか。」

「いや、ほんとうだとも。もし、わしのいうことがらそだったら、牛は返してあげようじゃないか。」

「よし、そんならとりかえよう。」

ジャックは、ミルク・ホワイトの手綱を老人にわたし、かわりにいくつぶんかの豆を受け取った。

ジャックは、そのまま家にひきかえした。市場まで行かなかったので、家に帰り着いても、まだ日が高い。

「おや、もう帰ったのかい。ジャック。」

と、母さんがいった。

「ミルク・ホワイトをつれてないところを見ると、売れたんだね。で、いくらだった。」
 「かあさんには当たり前じゃないよ。」
 「じらすんじやあないよ。さあ、いい子だから教えておくれ。五ポンドかい、それとも十ポンド、十五ポンド……、まさか二十ポンドつてことはないだろうけど……。」
 「当たり前じゃないっていったら。ミルク・ホワイトは、この豆ととりかえたんだから。この豆はすごい魔法の豆なんだよ。まいて、一晩おくだけでね……。」
 「な、なんだって！ おまえがそんなおおぼかのできそこないだったとは、きよらのきようまで知らなかったよ。あのミルク・ホワイトをこんなくだらぬ豆ととりかえてくるなんて。あれは村じゅうでいちばんよくミルクを出したし、うまい肉にだってできたつてのに。もう、かってにおし。あーあ、これでおしまいだよ。こんな豆がなんだい。窓の外にはほりり出しちまえっ！ えいっ！ ぐずぐずしてないで、とつとと寝ちまいな。今夜は、おまえに、飲ますものも食わすものもありやあしないんだからね。」
 母さんはかんかんにおこつて、どなりおらした。

54

ジャックはしかたなく、屋根裏にある自分の小さなへやにあがっていった。
 なんとんでも、母さんにわかってもらえないのがくやしかった。
 それに、腹がへつてたまらない。
 (ごはんも食べさせないなんてあんまりだ)
 と思つたが、つかれていたの、そのうちに眠りこんでしまった。

ふと目がさめてみると、へやがなんとなくおかしなぐあいだ。
 日がさしこんではいるのに、へやぜんたいが、なんだかす暗くて、何かのかげになつているように見える。
 ジャックはとび起きた。いそいで服を着ると、窓ぎわに走り寄つた。
 そこでいったい何が見えたと思う？
 なんと、ゆうべ、母さんが窓の外にすてた豆が芽を出し、一晩のうちに天までとどいていたのだ。

とにかく、あの老人のいったことは、うそではなかったってわけさ。
 しかも、その豆の木は窓のすぐ外に立っている。
 ジャックは窓からのり出すと、その木にとびうつり、どんどん登りはじめた。
 どんどん、どんどん、登っていくうちに、とうとう天まで来てしまった。
 ふと見ると、目の前に広い道路がまっすぐにのびている。
 そこで今度はその道を、どんどん、どんどん進んでいくと、高い塔のある、とてつもなく大きな家があった。戸口には、これまたびっくりするほど大きな女のひとが立っている。
 ジャックは、その女のひとの前に進み出ると、ていねいなことばづかいでいった。
 「おばさん、おはようございます。何か朝食はんをいただけませんか？」
 なにしち、ゆうべから何も食べていないのだから、もうおなかがべこべこだ。
 すると、大きな女がいった。
 「なに、朝めしがほしだつて。とんでもない。早くどこかに行っちまわないと、朝め

しにされるのはおまえのほうだよ。うちのひとは人くい鬼で、男の子の丸焼きほどの好物はないんだからね。さあ、早く行かないと、うちのひとが帰ってくるよ。」
 これを聞くと、ジャックはからだかふるえるほどびっくりした。それでも、おなかがすいていたので、熱心にたのみこんだ。
 「おねがい。ねえ、おばさん、きのうの朝からなんにも食べていないんですよ。このままうえ死にするくらいなら、丸焼きにされたほうがまだましです。」
 大きな女も、さすがにジャックがかわいそうになった。
 この人くい鬼のおかみさんは、もともとそれほど悪い女ではなかったのだ。
 おかみさんはジャックを台所につれていくと、パンとチーズのほかミルクまで出し
 てくれた。
 ところが、ジャックがその食事の半分も食べないうちに、ドシン、ドシン、ドシンと、ものすごい足音が聞こえてきた。
 その足音に合わせて、家がぐらぐらゆれだした。

資料2：アンケート用紙（実際に使用したものの改訂版です）**本 a について****1/2**

出前講義 I ○○時○○分～○○時○○分 ○○○○学校 2010年○月○○日(○)

番号() 氏名()

演習問題1 (本 a 三宅忠明/文 1978 ジャックと豆の木 家の光協会)

本 a を読んで、疑問点や不思議点や矛盾点を、できるだけ数多く列挙しなさい。

○○時○○分～開始、読む

～○○時○○分 [自分で列挙する疑問点や不思議点や矛盾点]

1()ページ _____

2()ページ _____

3()ページ _____

4()ページ _____

5()ページ _____

6()ページ _____

7()ページ _____

8()ページ _____

○○時○○分～次に友達と話し合っ、新たに発見した疑問点や不思議点や矛盾点を列挙しなさい。

1()ページ _____

2()ページ _____

3()ページ _____

4()ページ _____

5()ページ _____

6()ページ _____

○○時○○分～グループ発表 B4用紙にマジックで書いて、貼ります。

(本 b 大宮杉/文 1977 ジャックと豆の木 日本書房)



さしえ
口装てい

黒 沢 梧 郎



イギリス民話
大宮 杉・文

黒 沢 梧 郎・え



日本書房 版

なまけものの ジャック

むかし、イギリスの みやこ、ロンドンから、とおく はなれた い
なかに、とても びんぼうな おかあさんと、男の子が すんで しま
した。

男の子は ひとりっ子で、ジャックと いました。

おかあさんは、とても やさしい 人だったので、おとうさんの い
ない ジャックを、かわいそうに おもい、うんと あまやかして そ
だてました。

その せいでしょうか、ジャックと おなじ 年ごろの こどもたち
が、どんどん、お家の おてつだいを、するようになって、ジャッ

(10)

クは いそがしい おかあさんの てつだいを、なにひとつ、しようと
は しません。

一日じゅう、あそんで あるいて、てつだいどころか、おかあさんに
しんばいばかり かけて いました。

「ジャックや、まきを はこんで おくれ。」

「いやだい。手が よごれちゃうもの。」

「ジャックや、水を くんで おいで。」

「いやだい。おもたいたもの。」

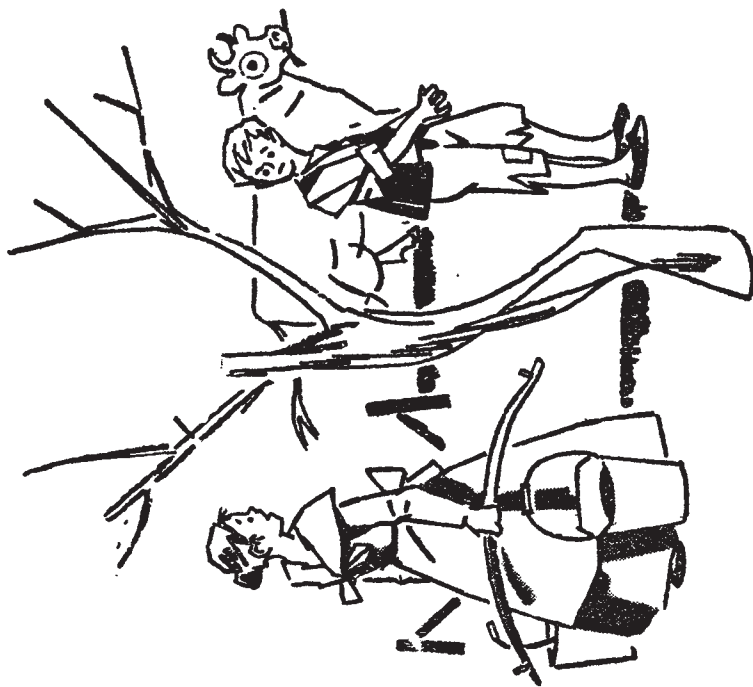
「ジャックや、おかあさんは、ちよつと 手が はなせないから、はた
けを 見まわつて きて ちょうだいな。」

「いやだよ。ぼく、はたけと はんたいの ほうく、あそびに いく
ところなんだ。」

(11)



こんなぐ
 あいに、ジャ
 ックのわが
 ままは、だん
 だんとひと
 くなって
 いくばかりで
 した。
 やさしい
 おかあさん
 は、家じゅう
 の ことと



(12)



を、ひとりで やって いくより しかたが ありませんでした。

「そんなことは、ジャックに させれば いいじゃないの。もう おおきいんだから—。おしりを たたいてでも、やらせるのよ。」

きんじよの 人たちは、おかあさん一人ではたらいて いるのを みかねて、いきました。

そのたびに、おかあさんは つぎのように こたえるのです。

「まあ、しかたが ありませんわ。わたしが わるいのよ。ジャックが ちいさい ときから、もつと きびしく、しつければ よかったんです けどね。でも、もう すこし おおきく なったら、しぜんになおる でしょう。」

おかあさんは、はたけを たがやしたり、糸をつむいだり、はたを

(13)

おったり、せたくを したり、こはんごしらえを したりして、朝あさから はんまで はたらきました。

今とちがって そのころは、じぶんたちの きる きものだって、あさや わたの せんいを、糸車いとぐるまに かけて つむぎ、できあがった 糸いとを、はたに かけて おって、きれじに しなければ ならなかった のです。

ただでさえ びんぼうなのに、ジャックが ちつとも はたらかない

(14)

ので、お家いへは、いつそう びんぼうに なりました。

「しかたがないわ。たべずには いられないからね。」
おかあさんは、かなしそうに つぶやきながら、じぶんの きものを

うりました。
きものが なくなると、テーブルや とだなを うりました。

こんな ことが、長く つづく わけが ありません。

おやこは とうとう、きたきりすずめ、お家いへの なかは、からっぽに なって しまいました。

それでも、ジャックは あいかわらず、はたらこうとも しないで、あそび あるいて いるのでした。

そして、おしまいには、

「これだけは、どんなことが あっても、手ばなす わけには いかな

(15)

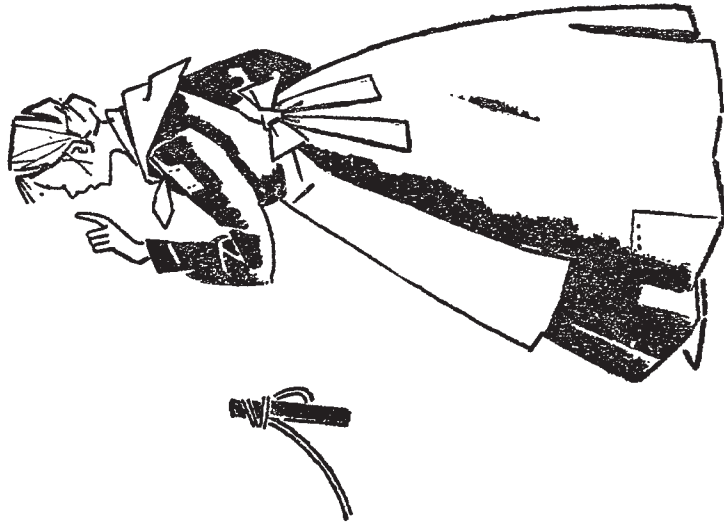
い。」
と、だいに していた、め牛めうしを うらなければ、パンを かう お

金かねも なくなって しまいました。

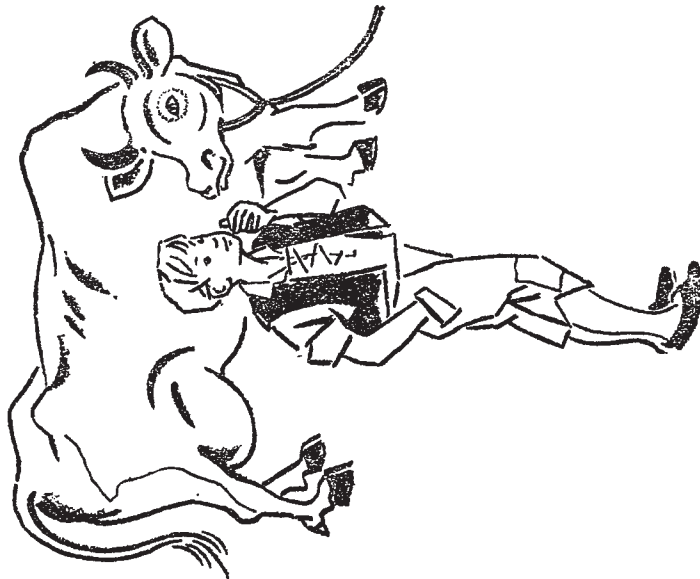
「ジャックや。おまえのように わがままな 手ては いないよ。ちつとも



はたらかないで、むだづかいをして、あそんではかり いるから、家は
 びんぼうになるばかりなんだよ。おかあさんは、パンをかう
 お金も、も
 うもって
 やしない。
 でも、家に
 は、め牛の
 ほかにう
 るものは、
 ないんだ
 よ。」
 「め牛を、



うるうよ。
 おかあさ
 ん。」
 「おまえは
 かんたんに
 いうけど、
 め牛がい
 なくなつた
 ら、はたけ
 のしごと
 もたいへ
 んだし、おちちも のめなくなつてしまふ……。でも、ふたりで



うえじに するよりは ましだから、しかたがない、め牛^{めうし}を うりま
しょう。おまえ、いちばく ひいて いて、なるだけ たかく、うつ
て きて おくれ。」

おかあさんの 目^めからは、なみだが ぼろぼろ ながれて しまし
た。

ジャックは、それを 見ると、おかあさんが かわいそうに なりま
した。

「いよ。ぼくが つれて いて くる。うんと、たかく うつて
くるから、だいじょうぶだよ。」

ジャックは、め牛^{めうし}を つれて、でかけました。

(18)

め牛^{めうし}と まめの ふくろ

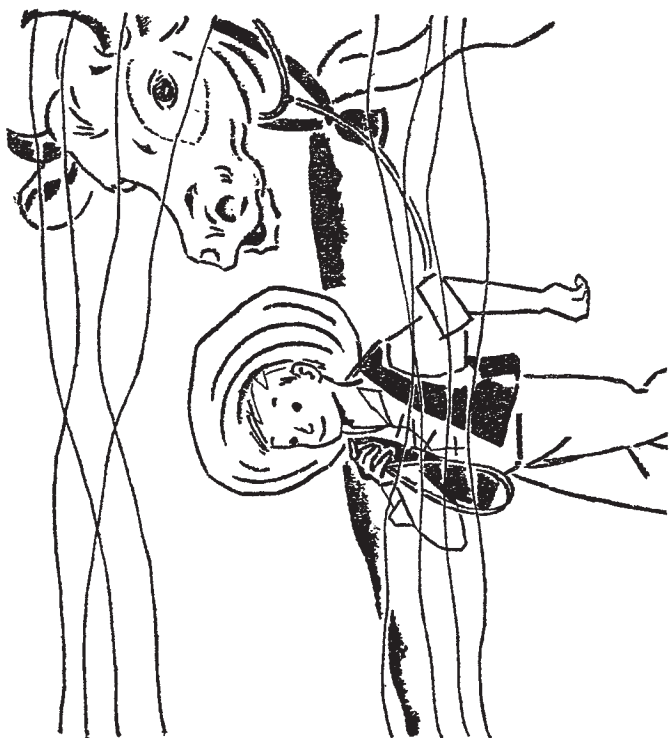
おてんきは いいし、けしきは きれいなので、め牛^{めうし}を ひいて、い
なか道^{いなかみち}を あるきだした ジャックは、もとからのんきもの なので
すから、おかあさんの なみだの ことなんか、すっかり わすれて
しまい、けろっと した かおで、うたを うたい はじめました。

すると、道^{みち}の むこうから、きんじよの にくやの しゆ人^{しゆじん}が、やっ
て きました。

にくやさんは、たおどまつて、ジャックに 話^{はな}しかけました。

「おや おや めずらしいね。おかあさんの だいじな め牛^{めうし}を おと
もに、どこへ でかけるんだね？」

(19)



「いおぼく しく とこな
んです。」

「ほほう。なんにも にも
つは ないようだが、いお
ぼく なにを しに いく
のかね。」

「め牛^{めう}を うりに いくん
ですよ。おかあさんが、う
つて きて くれたて い
つたんです。」

にくやさんは、この め
牛^{めう}が、とても ほしく な

(20)

りました。

「おじさんの もって いる ものと、とりかえっこを しないか。」

「お金^{かね}で なくちやあ だめなんです。できるだけ、たかく うつて
こいつて いわれたんですから。」

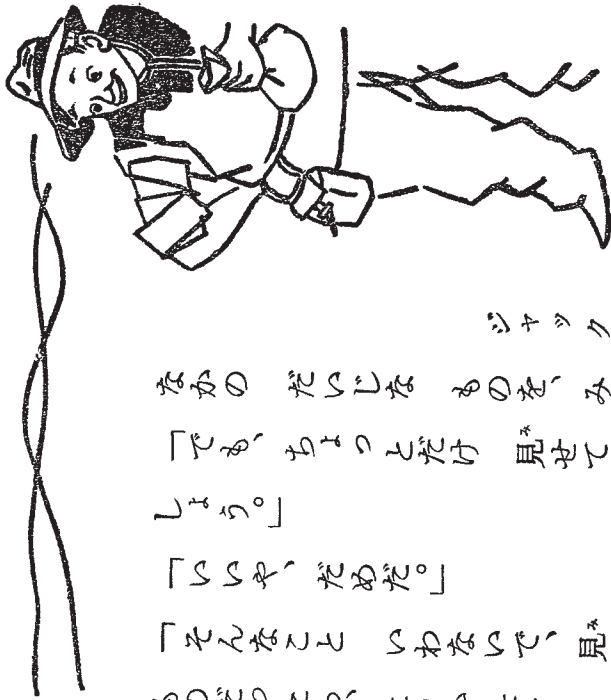
にくやさんは、ジャックが のんきぼうずな ことを、しつて いた
ので、にやにや わらいながら、こんな ことを いいました。

「それは、さんねんな ことだな。おじさんが、もって いる、こんな
すばらしい ものが、ジャックの 手^てには いらな—って ことだ
からな。こんな きれいな もの なんだがなあ。」

にくやさんは、さめくやしそうに、手^てにもって いた ふくろを、
ジャックの 目^めの まえに つきだして みせました。

「なあに おじさん、なにが はいつて いるの？ 見せてよ。」

(21)



「いや いや だめだよ。だ
じな ものだからね。とりかえ
っこも しないのに、ただで
見せて やるわけには、いかな
いさ。」

ジャックは、どうしても、その ふくろの
なかの だいじな ものを、みたく なりました。

「でも、ちよつとだけ 見せてよ、おじさん。そのぐらい いいで
しょう。」

「いや、だめだ。」

「そんなこと いわないで、見せて ください。ほくが ほしい
ものだったら、とりかえても いいからさ。」

(22)



「でも、お金で なくちゃあ、だめなんだろう。おじさんの もって
いるのは、お金じゃあ ないんだからね。」

にくやさんが、なかなか 見せて くれないので、ジャックは いっ
そう、ふくろの なかみが 見たく なりました。

「お金で なくても いいんだ。ほくの ほしい ものなら かまわな
いんだから。すこし ぐらい おこられたって、くいきです。」

「そうかい。それなら 見せて やろう。ほうら ころん。」

ジャックは、ふくろの なかを のぞき こみました。

「うわあ、きれいだなあ。」

ふくろの なかには、赤や、あお、きいろや、ももいろなど、にじの
ような 色をした、ふしぎな まめが はって います。

「どうだ、きれいな まめだろう。これでも、ほしく ないかね。」

(23)

「ほしいなあ、ほく どうしても ほしいや。」

「だいじな だいじな まめだが、もし ジャックが、どうしても ほしいんなら、ぬ牛と とりかえて やっても いいさ。だがなあ、だいじな まめだから、やっぱり よして おこうかな。」

にくやさんは、こころの なかでは、しめた、と おもいながら、こんな ことを いました。

「そんな いじわるを いわないで、とりかえて くださいよ。おじさん。」

ジャックは、いつしうけんぬいに たのみました。

「おかあさんに しかられや しないかな。」

「だいじょうぶ。ほくが ほしくて、とりかえるんだから、しかられたって、ほくが しかられるんだもの、おじさんは へいきさ。」

(24)

にくやさんは まめの ふくろを、ジャクに わたし、ぬ牛を じぶんの ものに しました。

ジャックは、おおよろこびで、まめの ふくろを だいに かがえて、もと きた 道を ひきかえしました。

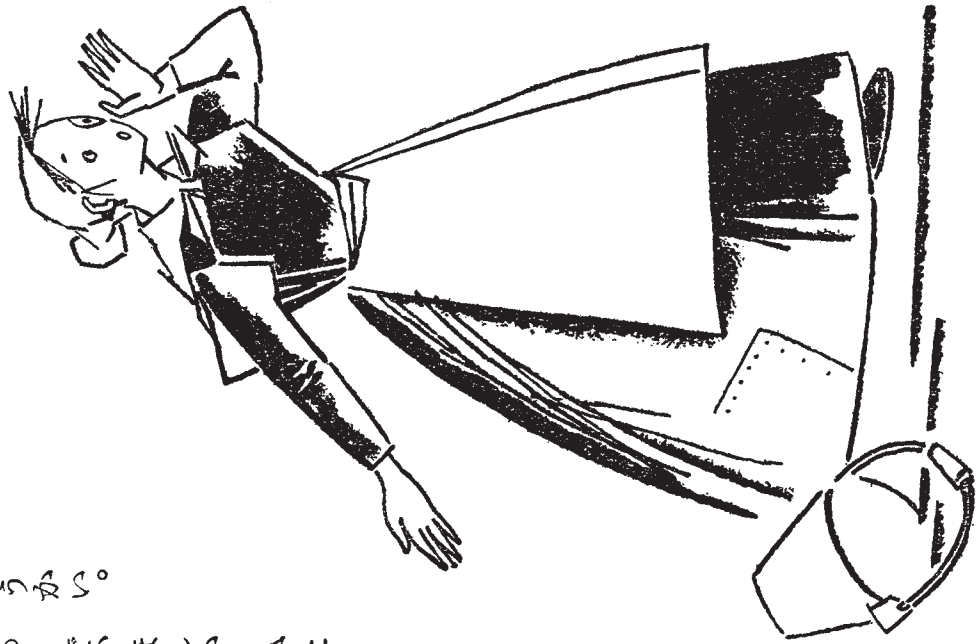
おかあさんの いかり

「おや、ずいぶん はやかったねえ。もう いちばまで、いつて きたのかい。」

おかあさんは、ジャックの かえりが あんまり はやいので、びっくりして たずねました。

「ううん、いちばまでは いかなかったの。」

(25)



(26)

「そうかい。
とちゅうで、ほしいひと
にあったというわけだね。それはよかったね。いったい、いく



らでうってきたの。」
「うらなかつたの。」
「えっ！ うらなかつたって。じゃあ、おまえのもっているその
ふくろは、なんだい。おかねがはいっているんじゃないの。」
「おかねじゃない。おまめなの。」
「おまめ？ じゃあ、め牛は いったい どうしたのよ。」
おかあさんは、ジャックの そばへ やつて きました。
「おかあさんにお見せ。」
ジャックは おまめの ふくろを さしだしました。
「おかあさんだつて びっくり しちやうよ。とっても きれいな、ふ
しぎな まめ なんだもの。だれだつて ほしく なつて しまうよ。」
おかあさんは、ふくろの なかを のぞき こみましたが、いろの

(27)

ついた まめが、十つぶばかり、はいつて いるだけです。

ジャックは、とくに になって、め牛と おまめを とりかえた はなしを しました。

おかあさんは、おどろいたり、あきれたり しながら、ジャックの はなしを きいて いましたが、

「まあ、おまえは なんと いう なさけない ことを してくれ た んでしょう。だいじな め牛を、こんなものと、とりかえて しまうな んて……、おかあさんは、おまえが こんなに ばかだとは おもわな かったよ。いままで、だいじに してきた め牛が、おまえの おかげ で、すっかり ふいに になって しまったじや ないか。

おまえは、わたしたち おやこが、あの め牛を、お金と とりかえ なければ、あしたの パンも かえないほど、びんぼうに なって し

(28)

まったのを しらなかつ たの？ でかけるまえに、 おかあさんの いった ことを、じょうだんだと おもつて いたんでしょ う。」

「ちがうよ。あのときは そう おもつて いたん だけど……ぼくは、どう しても この おまめが ほしい たんだもの。」

「ジャック、この 十つ



(29)

ぶにも たりない おまめで、どうして わたしたちの おなかが いっぱいになるの？

ああ かみさま、あなたは、どうして こんな ばかな こどもを、わたしに くださったのでしょうか。わたしは、こんなに いっしょうけんめい はたらいて、あなたの おぼしめしに そむかないように つとめて いますのに、なぜ、こんな ひどい ばつをおあたえになるのでしょうか。」

(30)

おかあさんが、こんなに まで おこったり、かなしんだりするのは、ジャックが うまれてから はじめてのことでした。

「こんな おまめがあつた ばかりに、め牛を ふいにして しまったのだから、この まめを、どうして やりましょう。やきすてようとしても、火は ないし、こなごなに して やりたいけど、まきわ

りを かりて こなくちや ならないから……。いつそのこと、こうして そとへ すてて やりましょう。いじの わるい とりが きて、すっかり たべて しまうように。」

おかあさんは はらだちまぎれに、まじの 外へ、おまめを すてて しまいました。

おかあさんの 手には、からの ふくろが のこつただけでした。

「あんなに まるまると ふとつた、だいじな め牛が、こんな きたない ふくろに なつて しまうなんて……。」

(31)

おかあさんは たまりかねて、なきだして しまいました。

おかあさんの、なくのを 見ている うちに、ジャックは、かなしくなつて たまらなくなつて きました。そして、いっしょになつて、なきだしました。

そのばん、ジャックは、おなかが くろくろなのに、なんにも たぐ
ずに、なきながら ねむって しまいました。

まめの木の たんけん

あくるあさ—

ジャックは、おなかが すいて いたので、いつもより はやく、目
が さめました。

そして、

「おやっ、どう したんだろう。」

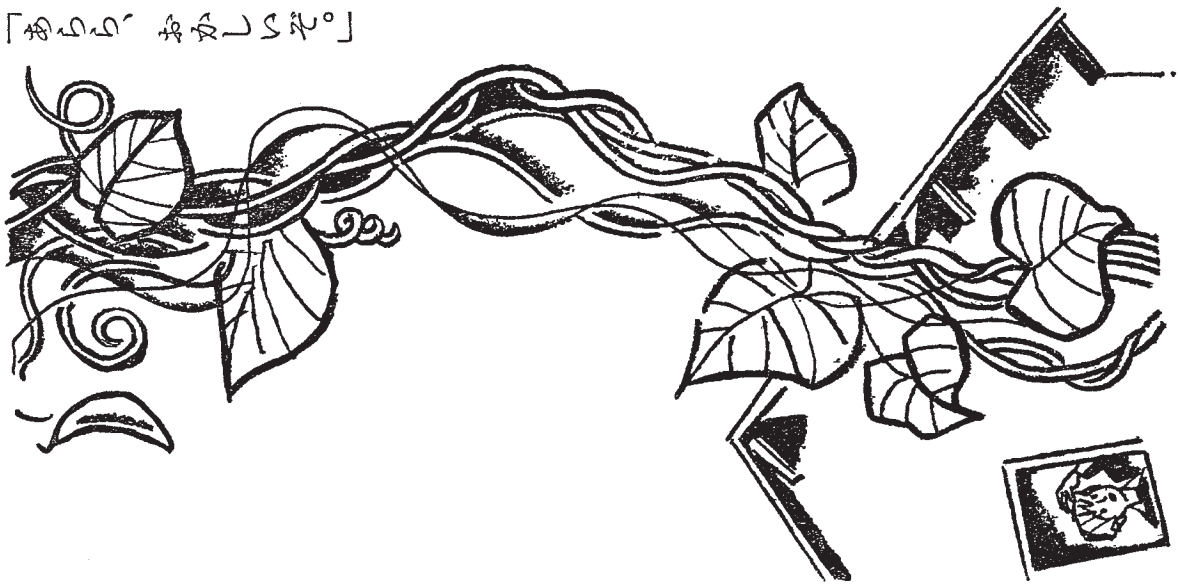
と、びっくりして、まどの ところへ かけよりました。

きのうまで なかったのに、まどの そとに、木のような ものが、

はえて いるのです。

まどを あけて みても、上^{うへ}の ほうは、いつばいに はっぱだらけで、空
が 見えません。

「あらら、おかしいぞ。」



ジャックは、おおいそぎで したに おりて、にわへ でて みまし
た。

すると どうでしょう。

土の ところには、きのう おかあさんに すてられた まめが、三つ
かたまって はじけて、そこから じょうぶな くきが はえて、
からみ あいながら 一本に なり、たかい たかい はしごのような
まめの木に なって いました。

(34)

「なんて のつぼな まめの つる なんだろう。」

ジャックは、木の てっぺんが どこに あるのかと 見あげました
が、さきの ほうは、くもに かくれていて 見えません。

ジャックは まめの くきはしごを ゆずぶつて みましたが、
とても じょうぶで、びくとも しません。

「てっぺんが どこに あるか、見たいなあ……。」

ジャックは、おかあさんの ところへ とんで いきました。

「おかあさん、おかあさん、たいへんだよ。まどの そばに、まめの木
が はえたんだよ。つるが あんまり のびちやつて、てっぺんが 見
えないんだ。ちよつと のぼつて みて きて いい？」

「ばかな ことを おしやい。きのうの め牛で まだ こりない
の。おきた ばかりなんでしょう。おまえは まだ ゆめを みて
いるんですよ。」

(35)

「ゆめな もんか、ほんとだよ、おかあさん。ぼくは、ちゃんと 目が
さめて いるんだもの。うそだと おもつたら、見に いて ござん
なさい。」

「だめ、だめ。それどころじゃ ありません。」

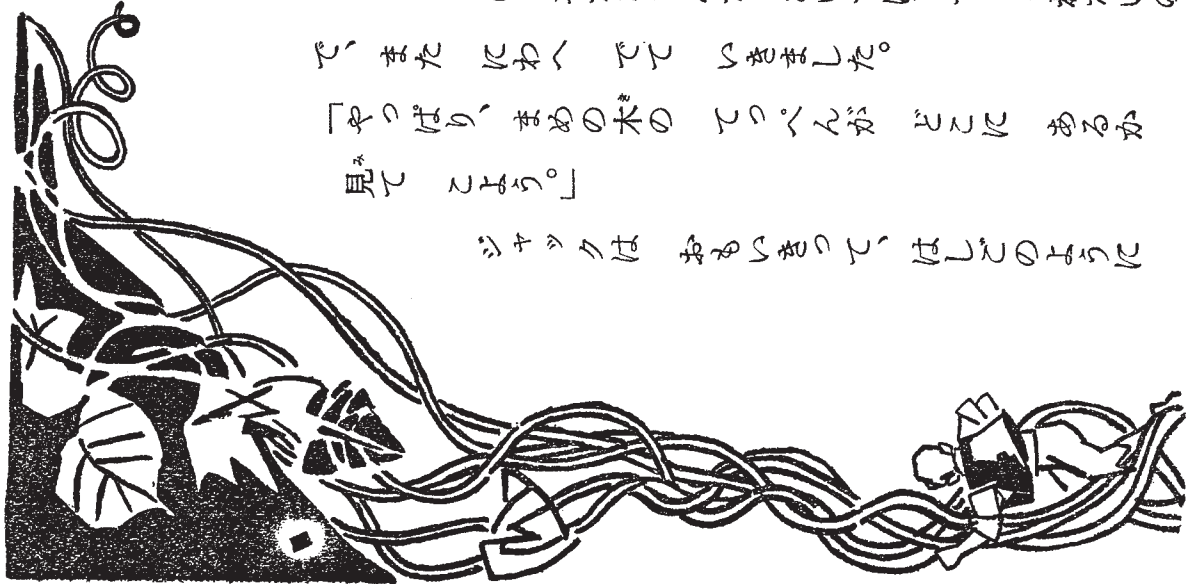
きょうの べんは、どうして 手に 入れるか、かみがえて いるんだから、
しずかに して いらっしやい。」

ジャックは、おかあさんが あいてに して くれな
いで、また にわく でて きました。

「やっぱり、まめの木の てっぺんが どこに あるか
見て こよう。」

ジャックは おもいきりて、はじこのように

(36)



なった、まめの木を のぼり はじめました。

まめの木の たんけんは、ジャックの こころを、すっかり とりこ
にして しまい、おなかが すいた ことなんか、わすれて しまっ
たのです。

みしらぬ 国

ジャックは、まめの木を のぼり はじめました。やつこら やつこ
らのぼりました。

下を のぞいて 見ると、家が ちいさく ちいさく 見えました。

まめの木は、とても のぼりよく なって きましたので、また す
んずん のぼりました。

(37)



資料3：アンケート用紙**本 b について**

2/2

演習問題 2 (本 b 大宮杉/文 1977 ジャックと豆の木 日本書房)

〇〇時〇〇分～〇〇時〇〇分 本 b を読んで、本 a の疑問点や不思議点や矛盾点は、解消しましたか。

1()ページ _____

2()ページ _____

3()ページ _____

4()ページ _____

5()ページ _____

6()ページ _____

〇〇時〇〇分～〇〇時〇〇分 今回のように、同じ書名の 2 冊の本を読むことで

1 読書に興味を持ちましたか(1～5 のどれか一つを○で囲む)

◎5 非常に興味を持ちました

○4 普段よりも興味を持ちました

3 普通です

×2 あまり興味を持ちませんでした

××1 全然興味を持ちません

2 あなたは普段、読書をしますか(1～5 のどれか一つを○で囲む)

◎5 大変よく読みます

○4 普通よりも読むほうです

3 普通です

×2 あまり読まないほうです

××1 全然読まないです

3 最近 1 か月に読んだ本の冊数を右の□の中に書いて下さい・・・> 冊

4 今回のやり方を続けたいですかどれか一つを○で囲む) 1 はい

2 いいえ

最後に、今回の出前講義について、感想を書いて下さい。
